

カルデア物語

黒白紅藍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人理焼却阻止後のぐだ男の話です。

FGOの知識があると読みやすいと思います。

二次設定が多いです。

加害意識と生存欲の強い主人公、藤丸立香のお話です。

少し暗いかもしれませんが、少々のお付き合いを。

「これは——やがて平和に向かう数ある世界線。その中のある一筋の話だ。」

目次

自分とは人殺し	
新しい日常と心傷	1
罪滅ぼし	37
それぞれの思想、それぞれの理想	62
森羅万象不変に非ず	85
開演の刻は来たれり、此処に万雷の喝采を	110
救いの雨	130
収束	154

自分とは人殺し

新しい日常と心傷

1・新しい日常と心傷

のための

0・プロローグ

人類史上最後のマスター、僕こと藤丸立香には、人類魔術の礎である処の、いわゆる人理というものを救う任務が課せられている。

今では、魔神王ゲーティアだか人王ゲーティアだか似非ソロモンだかの人理焼却を阻止したことにより、一旦はお役御免、前線基地と言えるカルデアで待機することになっているため、どちらかと言えば課せられていたというのが妥当だろう。

御役御免。

そう、御役御免である。

今でこそ、亜種特異点とかいう、ソロモン七十二柱の成れの果て、魔神柱が中心となつて引き起こされるゲリラみたいな戦いがあるから、しつかりと仕事があるけれど、人理焼却阻止直後の僕の周りは、出来ることが何一つとしてなかった。

いや、やろうと思えばできたのだけれど、英霊の一人『レオナルド・ダ・ヴィンチ』、通称『ダ・ヴィンチちゃん』から、「君たちは人の身では在り得ないような大仕事をやり遂げた後なのに、まだ仕事がしたいと言うのかい？ いいから休みたまえ。」と、あっさり断られてしまったので、何も言わずに身を引いた。

まあ、実際、僕は事務仕事とか苦手だし、何より魔術に関して言うなら三流の素人と
言える。

いくらロード・エルメロイⅡ世に教えてもらったとは言っても、元々のセンスが無さ
過ぎた。

そんな奴が、魔術協会に関しての資料を纏められるわけもなく、仕事が終わって二ヶ
月くらいは、用も無くカルデアに残った奇妙な精神構造を持つサーヴァント達ととも
に、ぶらぶらとカルデア内をうろついていた。

今思うと、その時のことを詳しく話していなかった。

僕からすればとても奇譚で、新鮮で、残酷な日常だった。

だから話そうと思う。

あの時のことを忘れないうちに。

懐かしむことのできるように。

あの悲しみを忘れぬように。

1—1

そんな風に話し始めて、早速話の腰を折って悪いけれど、一人の少女を紹介しておこう。

藤丸リツカ。

小柄で元気な赤毛の少女。今では『りつちゃん』『りつくん』と呼び合うくらいには仲良くなった。

偶然僕と同じ苗字で、名前も『りつか』と『リツカ』の違いだけ。

初めて会ったときは、それはもう親近感を覚えたものである。

一月の最初の日曜日辺りに会ったのだったか。

ゲーテア討伐から一週間。

「藤丸君。助けていただきありがとうございます。」

それが彼女との邂逅、その第一声。

場所はメデイカルケアルーム。ダ・ヴィンチちゃんに呼び出された時の事だった。

「?..どういふことかな。..えっと」

「藤丸リツカ。君と同じ、カルデアのマスター。」

マスター、という表現で良いのだろうか。

今となっては、被害者という感じがするけれど。

というか。

「あれ？でも、あの事故で、集められたマスター候補はみんな死んだんじゃないか？」

「死んでないです。全くもう失礼な。」

普通に怒っていた。

元気でピンピン動いている。

「ああ、そうだ。死んでいない。彼らが陥ったのは緊急冷凍だ。」
と、

声を掛けられた。

一瞬誰かと身構えたけれど、口調と声色で判断できた。

ダ・ヴィンチちゃんか僕の後ろに立っていた。

「彼女はその中の一人だよ。」

「ハロー、ダ・ヴィンチちゃん。」

「ハイハイ、ハロー。良い挨拶は良いものだね、本人の人の好きがにじみ出る。」

いつも通りの流れ。

「…それで、この流れから察するに、彼女は一年前の事故で意識を失ったマスターの一人、つて認識で合ってる？」

「ああ、それが一番的確だろうね。」

満足そうにうなずくダ・ヴァインちゃん。

「彼女は、君が魔人王ゲーティアを討伐した直後、意識……というか魔術回路が戻ったんだ。」

「魔術回路が戻る……？」

「ああ。戻るといふ表現で合っているのはわからないけど、魔術回路に魔力が流れ込んで、微弱ながら活性化した。で、あれから一週間。彼女の目が覚めたと言ふ訳だ。」なるほど……。

魔力が流れる＝意識が戻ったと認識できる。

そう言う事もあるのか。

「うん、OK。事情は分かった。でも、なんで僕を呼んだの？別に彼女と仲良かったわけじゃないよ？」

「君は、さらつとそういう事を言える辺り、デカイ人間だよな。……私が頼みたいことは、つまりはそういう事なんだ。」

彼女は……というか、彼なのか彼女なのか、よくわかっていないけれど、ともかくダ・ヴァインちゃんは、僕に向かってこう告げた。

勿論耳打ちで。

「彼女の友達になってやってくれないか？」

1-2

「彼女は目覚めたばかりで、しかも外も人理焼却後に目覚めたばかり、検査やら何やらで家に帰すのはあと三ヶ月。早くても二か月後が妥当だろう。だから、それまで彼女と話すカウンセラー的役割が君の仕事だよ。」

リツカちゃんを部屋に返した後、ダ・ヴィンチちゃんは僕にそう告げた。

つまりは、Dr. ロマンと似たような役割を任せられたのだ。

やる気が出ないわけがない。

とは言っても、そのやり方や定石と言うのは全く知らないし、彼のようにうまくできるとも思えないが…

「大丈夫。アイツのように上手くやれってんじやないんだ。彼女と触れて、ただただ普通の日常に寄り添ってあげるだけでいい。」

ダ・ヴィンチちゃん。

僕の心情をズバリ読み当ててアドバイスしてきやがった。

時には頼もしいけど、やっぱり心臓に悪い。

「…うん、いや。それは分かっているんだけどね。どうも、なんて言えばいいのか…」「ふむ…君にしては珍しい、煮え切らないじゃないか。何か思う処でもあるのかい？」

「無いって言うのがおかしいだろ？」

「そりやそうだ。」

「んん…まあ、何とかなるだろ。やってみるよ。」

「頼もしいな。それじゃあ頼んだよ。設備とかはある程度自由に使って構わないからね。」

「ああ、了解。」

右に曲がる廊下の向こう側にダ・ヴィンチちゃんが消えるまで見送って、僕は反対側、自分の部屋に向かって歩き出した。

まず、彼女と接するにあたって、ある程度のプランを立てなければならぬだろう。

自己紹介は当然として、カルデア内の見学やサーヴァントとの交流なんか良いかもしれない。

そうなると、マシユにも会わせてあげなければいけないな。

そんなことを考えつつ、僕は廊下を歩き続ける。

そんなこんなで歩き続けて、マイルーム前。

よく見慣れた姿があった。

眼鏡を掛けたパーカー少女。

「先輩。おはようございます。」

例の眼鏡の少女——マシユ・キリエライトはそう言つて、深々と頭を下げた。

「ああ、おはよう。マシユ。」

「ええ、本日もいい天気です。」

「いい天気つて…ああ、そうか。」

廊下に大きく開けられた窓を見ると、雲は無く、カルデアの外の風景そのままに、青い空が広く写っていた。

少し前までは毎日のように吹雪に覆われていたのだが、最近は晴れることも多くなつた。

そのおかげか、マシユも以前に増して明るくなった気がする。晴れの日様様だ。

「そうだね、いい天気だ。ところで、マシユ。こんなところで何をしていたんだい？僕に用事？」

「いえ、朝の運動がてらにフォウさんを探して居まして。」

「フォウ？」

「ええ、朝起きたらいなくなっていたのです。」

「はあん。」

なんだか、あの対マーリン決戦兵器、前よりも自由になっている気がする。

「…前はマシユにべったりだったのになあ。」

「そ、そんなことはありません。それに、フオウさんも生き物です。月日が経てば、変わりもします。」

「それはそうなんだろうけどねえ…。」

変化するって言ったって、あれの正体、ヤバいらしいしなあ。

マリーンから断片的に聞いたただけだけど。

「…うん、じゃあ一緒に探そう。僕も暇でね。」

「本当ですかっ！それは助かります。」

マシユはニコニコと楽しそうに笑う。

純度100パーセントの笑顔である。

うーん、かわいい。

「あ、そうだ。」

「?」どうかしましたか?先輩。」

「いや、それとは関係ないんだけどさ……。」

マシユに先ほどのダ・ヴィンチちゃんとの例の件を話すと、なんとも嬉しそうに、「それはとてもおめでたいですね!」と、笑っていた。

「では、歓迎会でも開きましょうか。今もまだカルデアに残っている英霊の皆さんも

集めて。」

「ああ。」

なるほど、歓迎会。

その手があったか。

「マシユ、ナイスだ。」

「はい？」

「いいアイデアをありがとう。開こうか、歓迎会。」

1—4

あの後。

マシユとカルデア中を探したが、フォウは出てこなかった。

まあ、明日になれば出てくるだろうという事になって、その日はいったん中止として別れた。

その後、やる事が無かったのでエミヤに少し料理を教わって、ジャックちゃんとナーサリーに読み聞かせ、ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイ、略してジャンヌちゃんには数学を教えたあたりで、一日分の時間は過ぎたので、自分の部屋に帰って寝たのだった。

と言う訳で、朝。

目が覚めた。

僕の視界に、浅黒く細い体と青い髪を持つ少女が映る。

「……………おはよう、静謐ちゃん。」

「……………おはようございます。」

布団一枚を挟んで、僕に押し掛かる静謐ちゃんの姿があった。

彼女がカルデアに来てから、何日かおきに僕の目覚まし時計がわりになってしまっている。

何時からだったか。

もう、結構長い事こんな感じだから慣れてきてしまっている自分がいる。

なんだか、苦虫を百匹ほど口に押し込まれたような夢を見ていた気がする。

「…うん、覚醒した。起きるから退いてくれるかい？」

「はい。」

「今日はどんな感じかな。」

「朝六時十八分。気温は二十二度。快適だと思います。」

「……………うん、ありがとう。」

体を起こすと、少し節々が固い。

久々に押し掛かれていたからかもしれない。

「……うーん、気分が良い朝だ。」

とりあえず、声に出す。

自己暗示のようなこれは、行いう事で、実際に気分が安定してくる。かなり前からの日課だ。

「……マスター、相当魔されておりましたが、大丈夫ですか？」

「え？」

ふむ。

なら、起きたときのあの感じは気のせいと言う訳でもないらしい。内容は覚えていないけれど。

「いや、僕は大丈夫。心配してくれてありがとうだね。」

「……………いえ。」

静謐ちやんの頭を撫でると、嬉しそうに笑った。

と、ここで思い出す。

「…あ、そうだ、忘れてた。」

たしか、今日の夜に歓迎会だったか。

相変わらずの記憶力にうんざりとしてしまう。

せっかくだし、周りへの呼びかけをしてもらうのも良いかもしれない。

「よし、静謐ちゃん。頼み事だ。」

「はい、何なりと。」

彼女は頷く。

とことん素直だ。

好感が持てる

「今日の夜にある人の歓迎会を開くから、その旨をほかのサーヴァントに伝えてくれ。職員相手には僕から伝えるから、サーヴァントだけにもれなく、ね。頼めるかい？」

「分かりました。」

一通りの要件を言い終わると、彼女は部屋から飛び出していった。

目に見えなかったけれど、そうだよな。

女の子でも敏捷A+だもんな……。

「…まあいつか。とりあえず食堂だ。」

朝ごはんを早く食べないとスイッチが入らない。

二度寝は厳禁だ。

人理焼却阻止以前よりも少しだけ緩くなったカルデアの規則の中に含まれている限りのラフな衣服に着替える。

下手に制服とかよりも、こつちの方が心理的不安は少ない。と一年前のテレビ番組で

やっていた気がする。

簡単なセーターとジーンズに着替えて、部屋を出る。

今日の食事当番は、確かエミヤかエレナだったはずだ。

どちらの食事もかなりおいしい部類に入と思う。

食堂に着いたら、まずはエミヤに声を掛けるべきだろうと考えながら食堂の扉を開けると、案の定、キッチンで配膳をするエミヤの姿があった。

「おはよう、エミヤ。」

「ん？ああ、マスター。相変わらず朝に強いな。」

「ほかの皆は？」

「まだ起きてきていない。君が一番速いぞ。」

「そう。ところで、イベント系の話があるんだけど、少し良い？」

そう言うと、彼は爽やかな顔から一転、訝し気な表情になる。

「ああ、構わんが……何をするつもりだ？」

「我らが仲間の歓迎会さ。」

「仲間？まさか、また召喚を」

「違う違う。一人、まだ存命でいらっしやる女の子が加わったんだ。」

そこから、昨日の一連の件を伝えると、『なるほど納得がいった』とでも言わんばかり

の表情がエミヤに浮かぶ。

「……………だから、エミヤにはその歓迎会の料理を頼みたくてね。お願いできる?」

「分かった。そういう事なら協力しよう。」

「おつ、サンキュー。話が分かるね。」

「これでもフランスから旅を続けているんだ。この程度の話も分からなくてどうする。」

「それもそうだね。」

よし、これで料理の面は何とかなった。

次に何を準備するかと考えて、何個かアイデアが浮かんだ。

ふむ……………。

「ねえ、エミヤ。エミヤだったら次に何を用意する?」

「歓迎会のものか?」

「うん、そう。色々有り過ぎて分かんなくなっちゃって。」

「ふむ……………なら、最初は飾りつけだろう。一番楽なものだぞ。適任が居るんだから。」

「?」

「それで、私のところに来たのかい？」

カルデア内部、北側書庫。

その書庫の八段もある本棚の上に座って、件の人物は本を読んでいた。

話をしたところ、静謐ちゃんも、さすがに上には気付かなかつたらしい。話を通つていなかった。

「それは確かに、適役だね。」

「ああ、協力してくれるかな、マーリン。」

「いいとも。一応これでもサーヴァントだからね。マスターの頼みに応えようじゃないか。」

二つ返事で協力してもらえなくなった。

なんだかんだと言って、カルデアのサーヴァントは優しい人が多いらしい。

「ありがとう。んじゃあ、会場は食堂にするから、そこに合う花の調達と、あとハーブを。」

「ハーブ？」

「ああ、エミヤの料理にレパートリーが広がるだろうから、それをお願い。出来る？」

「そりゃあ、出来るとも。私は花の魔術師、だからね。」

ウインクを見せるマーリン。

うん、やはり女遊びに慣れているらしい。

様になっているチャラさだ。

「マスター。今、失礼なことを考えていなかったかい？」

「いや、別に、これっぽっちも考えてないけど。」

「ふうん……まあいいさ。」

そう言つて、八段目から飛び降りる。

ストンと軽い音がして、すぐに立ち上がった。

「すぐに準備に取り掛かろう。せっかくの歓迎会だ、派手に行こうじゃないか。」

「その調子で頼むよ。僕にはできないことだから。」

「……………うん、私はいいマスターを持ったものだ。」

「え、何さ突然。」

「いや、自分に出ることと出来ないことを的確に判断することのできる人間というのは、なかなか居ないものだよ。」

「へえ、そうなんだ。」

「ああ、類稀なる才能さ。だから、そんなマスターと契約出来たのはかなりの幸運なんだ。」

「そう言われると、なんだかこそばゆいモノがあるね。」

あまり褒められることも無かったから、こういうのは慣れない。

「まあ、それくらいのものは受け取っておくべきさ。……あ、そうだ。」

「うん？」

僕の先を歩いていたマーリンは、思い出したように振り向いた。

「次に準備するものは決まっているかい？」

「いや、決まってるないけど。」

「なら、食材を集めた方がいい。足りなくなると思うからね。」

1—6

現在、カルデアに住み着いて、もとい召喚されているのは、前にあげた9人のほかに、アルトリア率いる《円卓》のサーヴァント。武蔵、小次郎などを代表とした《日本》のサーヴァント。エレナを筆頭とする《学者系》のサーヴァントなど、総勢50余名のサーヴァントがあげられる。

その人数分の食事に加え、今日は軽く見積もっても、その二倍以上の料理が用意されなければならないのも必然。

そんな助言をマーリンからもらった僕は、フランスはオルレアン。

まだ、人里離れた森の奥に邪竜の住みつく竜の国へと、足を伸ばした。

「それでは、アサシン諸君。ワイバーン狩りをお願いしたいんだ。一人五体狩れたら、

「ここに戻ってきてくれればいいから。」

連れてきたサーヴァントを見渡す。

と、ここで思い付いた

「いや、先に点呼の方がいいのかな？」

一応知った顔ではあるけれど、しっかりとした確認は事故の防止につながる。

と言う訳で。

「じゃあジャックちゃん。」

「はい。」

「静謐ちゃん。」

「ここに。」

「酒呑。」

「おるよ。」

「小太郎。」

「はい。」

「ジキル。」

「いるよ。」

以上、五名。

「うん、んじゃ、出る前にもう一度点呼を取るから、よろしく。」

「ねえ、お母さん。解体して良いの?」

「良いよ。ただし、出来る限り大きくお願いできるかな。あと、そうだな……………静謐ちゃんと一緒に戦ってくれると助かるかな。」

「うん、分かった!」

元気に頷いて、森の奥に走っていく。

「んじゃ、静謐ちゃんはジャックちゃんをお願い。」

「承知いたしました。」

「よし、解散。」

僕の声と同時に、それぞれが各方面に散らばっていった。

森の端の方に僕だけが残る。

暫くはぼうつとすることに決めて、近くに倒れる木の幹に座り込んだ。

「……………」

そう言えば、ここには一番最初に来た場所だった。

空には、あの円環はもう無いけれど、最初に見た惨劇という事もあって、どうも頭から離れない。

幻視と分かっているが、そこにあの円環があるような気がしてならないのだ。

何度も繰り返し返し考え、答えが出ないことはもうわかっているけれど、それでも考え続けなければならないのが、そのあたりの事だ。

人理修復。

僕の成し得たそれは、この語の世界を揺るがす大事業とか、そんな風な過大評価を受けているけれど、正直どれほどの事なのか、よく分かっていないのが現状だ。

実感が湧かない。

そりゃあ、世界の人間が元に戻ったとか、その程度の事は聞いているけれど、そもそも僕はずっとカルデアの中に閉じこもっていた訳で、現在の街を見ても、カルデアに一年間行つてから帰ってきたくらいの実感しか湧かない。

だから、被害の方がずっと大きい。

フランスで竜に村を襲われた。

ローマで王に征服された。

大海では仲間が撃たれ、イギリスでは多くの市民が死んだ。

アメリカでは兵を貫かれ、砂漠で大量の血を見た。

拳句の果てには、八名を残して全員を殺してしまった場所すらあった。

こんなに多くの命を守れず、何が人理焼却阻止だ。

きつと後悔は一生僕について回るのだろう。

とある王にはあの夜、あのように言われたけれど、これだけはどう頑張っても拭えなかった。

夜でも、悪夢で度々起こされる。

昼でも、暇さえあればこの様だ。

流石に笑えない。

胸を張って、笑うことなどできない。

少しでも泣けたりしたら、少しは救われたのだろうけれど、もう何回も泣き過ぎて、い加減涙も流れない。

こういう慣れは怖いものだと、以前、誰かから教えられた気がする。

誰だったか。

.....

ダメだ、思い出せない。

あの時は絶対に忘れないようにと、心に刻んだはずなのに。

「.....だめだなあ、僕は。」

本当にダメな奴だ。顔向けできない。

マシユにも、あの人も。

「.....。」

多くを助け、少なきを殺す。

そうするしかないのは分かっている。

だけど、僕には少なきが重すぎる。

1-7

二時間ほどで戻ってきた。

僕は指示を出すだけだったし、魔力消費の少ないアサシンという事もあって、そんなに疲れていない。

案の定、ジャックちゃんが少々狩りすぎてしまっていたけれど、それなりの収穫があった。

量にして合計約三十三頭分。

上々だ。

食堂に向かうと、ロビンとビリーが居た。

「よつす、二人とも。何やってんの？」

声を掛けると、二人してこちらを向いて笑う。

「ああ、マスター。ポーカーだよ。」

「マスターもどうです？」

「後で時間があつたら参加させてもらおうよ。今はエミヤに用があるんだ。」

「あつそ、そりゃあ残念。んじや、パーティー中でももう一度誘おうかな。」
「ビリーは慣れた手つきでコインを弄る。」

「うん。それじゃ、あとで。」

机の間を縫って、キッチンに向かう。

簡素なドアを開けて入ると、そこにはここに居るのが珍しい人物がいた。

「あれ、マシユ?」

「あ、先輩。お疲れ様です。」

「珍しいじゃん、こんなところに。どうかした?」

「いえ、先輩の姿が見当たらなかったものですから。」

どうしたのだろう。

普段は一々挨拶などに来ないはずだが、用事か?

「僕に用事でもあったの?」

「いえ、ですが静謐さんから例の事を聞いたもので、力になれることがあればと思いま
して。」

「ああ。」

なんとも健気だ。

一年前から成長しても、そこは変わっていない。

僕とは違う。

羨ましい。

「ん？あれ？つていうか、エミヤはここに居なかった？」

「エミヤさんならマーリンさんを訪ねて、先程食堂を出て行きました。なんでも、見慣れぬハーブが置かれていたから、と。」

「……忘れてた。そう言えば伝えてなかったな。」

マーリンに頼んだ後の伝達を忘れていた。

「なら、エミヤが戻ってきたらこれを渡して、その後に手伝いが必要か聞いて。もし無かったら僕の手伝いを。」

「了解です。」

そう言つて、マシユは袋を開けて、調理台の上に置く。

「うわあ、多いですね。何の肉ですか？」

「ワイバーン。その袋はほほ肉かな？」

僕の言葉にマシユの顔が輝くように笑う。

「ワイバーン！良いですね、あのお肉は美味しかったです。」

「そうだろう？だから、今し方アサシンたちと狩ってきた。」

「そうだったのですか。なるほど、安心しました。」

「何?」

「いえ。先輩がとてもお疲れの様子だったので、少し心配していたのですけれど、気負い過ぎとかの要因でなくて安心しました。」

愕然とした。

疲れている?

あの程度の戦闘で?

先に述べたように、今日の戦闘はとても楽なものだった。

だというのに、僕は疲れていたのか?

「……………先輩?大丈夫ですか?お休みになった方がよろしいのでは…………」

「いや、大丈夫!ほらこの通り元気だよ。」

腕をぐるぐる回して、何とかアピールする。

「最近、面白い本を見つけてさ。夜更かし続きだったんだけど、僕が疲れているのは、多分その関係だよ。」

「……………そうですか。なら、安心しました。」

ニコリと笑う。

「ですが、もう少し休まないとだめですよ。睡眠もすっかりととらないと休養にならないと、ドクター・ロマンが言っていました。」

「あー……うん、そうだね。気を付ける。」
懐かしい名詞だ。

いや、まだ一週間くらいしか経っていないのだけれど、それでも、何年も前のようにあの光景が焼き付いている。

「……うん、ドクターの言った通りだ。少し休んでくる。エミヤに聞いて、何もやることが無かったら、リツカちゃんのところにも挨拶に行くといい。」

「はい、分かりました。おやすみなさい、先輩。」
食堂を出る。

早く一人になりたかった。

少しあのことを考えただけで疲れるほど追い詰められているなどと、考えたくも無かった。

1—8

『ねえ、お兄ちゃん。』

なんだい？ 僕に何か用かな、お嬢ちゃん。

『私のお母さんとお父さんは何処に行ったの？』

安心して、きつともうすぐ帰ってくるよ。

『嘘だ。』

何を言うんだ、嘘なわけがないだろう。きつと帰ってくる。

『嘘だ。』

本当だよ、帰ってくる。向こうで疲れて休んでいるだけだ。

『それは嘘だよ。お兄さんが一番よくわかってるでしょ？』
なんで、そう言い切れるんだい？

『だって私のお母さんとお父さんは、竜に食べられちゃったんだもん。』

『ねえ、そこのお兄さん。私の恋人を知らない？』

どんな方でしたか？容姿とか、性格とか。

『格好いい男よ、あの人は。結婚の約束をして、兵になったわ。ねえ、今彼は何処に居るの？』

……もしかして、その人の名前は■■■■さんですか？

『そう、彼よ！彼は今向こうで何をしているの？』

……彼は……

『……そう、死んだの。』

……

『……いだ。』

え………？

『あなたのせいだ。貴方が弱いから。貴方が来たから。だから彼は死んだのよ。』
.....

『だから彼は串刺しになって、血を流して死んだのよ!!』

『なあ、カルデアのあんた、おかしいと思わねえか?』

何がですか、海賊殿。

『こないかれた海にずっと捕われてる意味だよ。』

?海は、貴方たちの生きる意味では無いのですか?』

『俺達は、自分の時間を殺して、こうして生きているんだ。確かに海は、俺達の生きる意味だし、むしろ俺たちが海と言っていてえくらいなんだが、だがちとこの海は違う。』

はあ...

『ここは、俺達の海じゃねえ。なあ、カルデア。何時になったら解放されるんだ?』
聖杯が取れたらです。そうしたら、ここは無くなります。』

『なあ、頼む。頼むから、早くここから出してくれ。』

.....
努力はします。

『ああ、努力してくれ。頼むよ。』

.....

『頼むから、早く海を、俺らの海を返してくれ。』

『警察です。少しお話をお聞かせ願いたい。』

はい、構いません。何をこそ望んで？

『つい昨日にあった、スコットランドヤードに置いての虐殺事件について、知っていることがあれば、お聞きしたい。』

あれは……切り裂きジャックの仕業と聞いています。

『……それは、貴方が見たのですか？』

はい。すぐに逃げてしまいましたけど。

『何故逃がしたのです。』

油断です。僕たちはその時油断していた。

『スコットランドヤードもあなた達ももう少し早く訪れていれば、ああはならなかったものを。油断で済みますのですか、貴方は。』

違う！そんなつもりは

『この事件は、貴方の油断が原因だ。』

『なあ、カルデアの勇敢なる我が同志。』

何かな、我が同胞。

『同胞とは、オマエも相当慣れてきているな？』

そりゃあ、伊達に旅してないからね。それで、なに？

『此度の戦争。お前は何を見た。』

…人の生き汚さ。

『何がお前にそれを見せた。人の死か。血の雨か。』

…それは

『ああ、そうだ。それは違う。じゃあ何か。』

……

『まさか、エジソン氏のロボットでああなったわけではあるまい。ならば何か。そう』

……やめろ。

『お前の殺した人の数だろう。』

『ねえ、お兄ちゃん。』

何だい、坊や？

『お母さんが戻ってこないの。聖都に行ったまま、帰ってこないの。』

ああ、そうかい。それはね。きつと向こうで君を待っているんだよ。

『そうなの？』

ああ、そうさ。だから早く、聖都に辿り着かないといけない。

『うん、でもさ。少し変なところがあるの。』

なんだい？話してみて？

『うん。僕のお母さんね。』

うん。

『僕の前で死んじやったんだ。』

『なあ、旅のお方。』

なんですか、お婆さん。

『この国は素晴らしいじやろう。活気があつて、若手も多い。』

ええ、この王は本当に素晴らしい方です。

『じやろう。わしはこの国が大好きなんじや。死んでは慣れるのが惜しいくらいに。』

そうなんですか。

『ああ。ま、そのうち全員、貴様の手で死ぬのじやがな？』

『君が殺したんだ、立香くん。』

ロマニが立っている。

白い空間にたった一人。

他には何も無い。

僕の体とロマニだけがこの空間にある。

と、不意にロマニが僕の肩を掴む。

『人類悪、人類悪とシバやカルデアスは煩いけれど、僕はこう思うよ。』

.....。

『人類悪とは君だろうか？人を愛し、人を救おうとする。故に、君は人を殺す。』

.....やめろ。

『君は英雄を履き違えている。誰をも救おうとするそれは、英雄でなくただの愚者だ。』

やめろ。

『おまけに君は弱いから。僕が死んでまで敵を殺す必要が出てきたんだ。』

やめろ！

『ここまでに死んだ全員。全てを君が殺したんだ。』

やめろやめろやめろ！僕は間違つてない言われたことをしただけ何も悪くない僕は人が救えればそれで良いんだ他には何も望まない友愛もいらぬ平和もいらぬ何も何もいらぬマシユだけが居ればいいんだあの子は絶対に殺させない僕が守る死んでも守る絶対に絶対に絶対に絶対に殺させない死んでほしくない死んでしまつたら死にたくないそれは嫌だ死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死ぬのは怖いんだだから死なない死んでなるものか怖いのは嫌なんだ寂しいから嫌なんだ怖い寂しい死にたくない死にたくない死にたくない

死んでも死にたくない

「……………」

目が覚めた。

背中には冷や汗、動悸と息切れが激しい。

相当魘されていたらしい。

そして、何故だか手が痛い。

「あ、あれ……………」

確か夢を見た。

これ以上無いぐらいの悪夢に苦しめられたのが思い出せる。

「それで……………えつと……………」

この手の痛み。

魘されているときに何所かにぶつけたのだろうか。

いや、それはない。この部屋の壁は柔らかい素材でできている。

だから、ぶつけたとしても、ケガをすることは殆ど無い。

ならば、これは一体なんだ？

「……………まあいいや、一旦起きて、それから」

目の端に何か映る。

見慣れた色合いだ。

灰色と黒と薄紫の人型の何かが倒れている。

床に落ちていているのは、形からして眼鏡だろうか。

何故だろう、息が出来ない。気持ちが悪い。喉が痛い。

体が軋む。

涙が止まらない。

怖い。

怖い。

こわい。

「……………」

何かが聞こえた。

男の声と女の声。

赤い影が走ってくる。機械の腕が人型を抱く。

マシユ・キリエライトが倒れていた。

右側の頬を赤く腫れさせて、苦しそうに呻く。

うねうねと胸をくねらせて、痛みに悶えるように唸る。

顔が此方を向いた。

嗚呼、なんて憎々しげな表情なんだ。

そんな顔で見ないでくれ。

なんで君はそうなった。

なんで君は

「とうとう私を傷つけましたね、先輩。」

罪滅ぼし

2・罪滅ぼし

2-0

意識の戻る感覚があった

ベッドであろう柔らかい背中面の面に、肩甲骨が押し付けられる感覚。体に重力が戻ってくる。

未だ瞼が重い。朝には強いはずだったのに、目を開けるのが億劫だ。

少しずつ意識が戻ってくると、耳元で規則的な機械音が聞こえる。

病院で聞いた音だ。名前は呼吸心拍監視装置だったか。ピツ、ピツと一定の間隔で音が鳴っている。

いい加減、周囲の状況が分からないので目を開ける。

見慣れぬクリーム色の天井が視界いっぱいに映った。

僕の部屋ではない。ここよりもう少し天井の色が白いはずだ。

腕を動かそうとして、違和感。

見ると、点滴のような管が腕に繋がっている。

「……………えっと。」

体の怠さはこの点滴が原因か。

なんだろう、入院している気分だ。

まあ、今はそれは置いておこう。

とりあえず。

「……………何があつたんだっけ。」

確か、リツカちゃんの歓迎会をしようという話になったのは覚えている。

エミヤと話して、マーリンに相談して、それで……………。

「ッ!？」

記憶が流れ込んでくる。

夢の記憶。

罪の記録を思い出した。

死の記憶。傷の寄り集まりが、頭に流れ込んでくる。

頭が痛い。息が苦しい。体が歪んで…

『先輩。』

と。

気付く。

頭に直接響く声。

聞き慣れたその声に体を起こす。

すると、ベッドに横たわる僕の下半身。その上に座るマシユの姿があった。

「……マシユ？」

『先輩、貴方は酷い人です。』

「!?」

『他人を殺すに飽き足らず。貴方はもしや、ソ連時代の独裁者の生まれ変わりですか？』

「違う、待ってくれ違うんだ。僕はそんなつもりじゃ」

『傷つける人は、皆そう言うのです。僕は悪くない。傷つけるつもりじゃなかった。』

そんな風に取り繕う。もし先輩が今の私なら許すのでしょうか、ですが。』

眼鏡の奥の目が濁る。

『そんな言い訳、私は嫌いなのです。』

「…………マシユ。ねえ、マシユ。」

『なんででしょう。』

「僕は、どうすればいいんだ。どうすれば、この地獄から解放される?」

『先輩、あなたは如何されたいのです。』

「僕は――」

どうされたい。

決まっている。

「僕は許されたいんだ。殺した人に謝って、過ちを謝って、それで許してほしいんだ。」

一言。

重く感じた。

『そうですね……分かりました。私もお世話になりましたし、私の予想くらいは教えて差し上げます。』

嗤った。

不気味な笑顔を、彼女は浮かべる。

『ですが、そのためにはまず不公平を無くさなくてはなりません。個人差があつては誠意は感じられませんからね。ですから、やらなければならぬ事が一つあります。』

ニヤニヤ、と。

「……わかつた。何をすればいい?」

かつてのソロモンのような、黒く不気味な人形の笑顔。

『では、貴方の総ての恐怖で以て、私を殺してみてください。』

2—1

「……………」

「ツ!!!」

声が聞こえて、飛び起きる。

冷や汗が流れて、恐らく涙であろう液体が頬を伝う。

何が何だか分かっていないのに、思考は恐怖と怯えしかない。

視界が歪む。

息が荒い。

「ああ、よかった！やつと起きたか、立香君。」

誰かの声。

弾けるように顔を上げると、例の芸術家の姿があつた。

「気分はどうだい。」

なんて言つて、此方に手を差し伸べる。

怖い、嫌だ、来るな、きつとまた傷つける、止めて、来ないで、お願いだから

「……………さすがに、そんなに怯えられると少しショックだな。」

ダ・ヴィンチちゃんは直ぐに手を引つ込めた。

悲しそうな顔だった。

そのまま、踵を返して部屋から出て行く。

そう言えば、ここは何処だろう。

僕の部屋では見ないようなクリーム色の天井と壁が僕を囲っている。

ちよūd夢の中に様な部屋だ。

腕を動かそうとして、点滴のコードが邪魔になる。

頭痛も酷い。

と、ここで機械音とともに、普段から使っている通信が入る。

『やつほー、立香君。』

「……………ツ、ダ・ヴィンチちゃん。」

『これなら君への精神的負担も比較的少ないと思うが、どうだろう。』

「……………まあ、それなりに。」

『全く、一年も一緒に戦ってきた相手に怯えられるというのは、いささか堪えたけれど。まあ、それはそれ、しょうがない事なのだろうね。』

「……………ごめん。」

『いいさ、君は人間なんだから。』

人間。

果たして僕は人間なのか？

プライミッツ・マードーよろしく、あんな量の人を殺しておいて？

『それよりも、一つ聞いておきたいことがある。辛かったら答えなくてもいい。』

「……………なに？」

『今現在、君の精神状態と身体状態をモニターしているんだ。』

「……………。」

『無許可で悪いとは思いますが、まあ許してくれ。それで率直に言つて、今の君は精神状態が著しく不安定だ。』

何かあるなら話してくれないかな？』

「……………何も無い。ただの後悔だよ。」

『……………そう。君が言うならそうなんだろうね。』

溜息のような吐息が聞こえる。

『なら、君は昨日の夜の事を覚えているかい？』

「昨日の夜……………？」

昨日の夜。

確か、マシユに少し休むことを告げて、それで自室に行つて、それから

「ヒツ……………」

『思い出したかな。』

「僕は……マシユを？」

『連絡を受けて、部屋に言ったらあの状態だったよ。』

『この話を踏まえてもう一度言うよ？何があった。』

「僕は……。」

マシユを傷つけた。

唯一と言つてもいい大切な人を、僕はこの手で傷つけた。

自分でも記憶がない。でも確実に僕のせいだ。

何とかしないと。

何とかしないと、ほかの皆に危害を加えてしまうかもしれない。

それだけはダメだ。

「……出来れば、話したくないんだ。ゴメン。」

『いや、別に構わないさ。何が何でも話せて誤じゃない。』

「……マシユの容体は？」

『安定しているよ。頬に少し痣が残っちゃったけど、それも数日で消える。少し脳震盪があったから心配していたけれど、そっちも問題なさそうだし。』

「そっか……。」

これで安心した。

いや、そもそも傷つけた僕には心配の権利すらないのではないだろうか。

加害者が被害者を心配するなど、あつてはならないことだ。

でもまあ、後遺症が残らないのならひとまず良いだろう。

『なあ、立香君。』

まだ通信が切れていなかったらしい、ダ・ヴィンチちゃんは僕に声を掛けた。

「何かな。」

『一応、私は君の仲間であるつもりだし、他に何人も、君の仲間が居る。だから、少しくらいは迷惑をかけてくれてもいいと思うよ。んじや、これで通信は終わり。何かあつたらこれで声を掛けてね。』

一方的に捲し立てられて、通信は切れた。

「……そんなこと言われたら、頼れないじゃないか。」

彼らには、もう迷惑はかけてきた。

それに、これは僕が解決しなければならぬ。

ただでさえ数の少ない『僕に出来ること』を、他人になんて押し付けられない。

2—2

「なあ、マーリン。」

『おや、マスター。通信なんかでどうかしたかい？』

「頼みがあるんだ。きつと君にしかできない。」

『ふうん?』

「頼めるかな。」

2—3

頼んだのは、空間転移。

もはや魔法の域に達している魔術。

そんな風に做った。

だから、これは魔術を使った逃亡だ。

当然、そんなことをすれば封印指定を受ける可能性だつて出てくるけれど、それでも

良かった。

あそこから居なくなればそれでいい。後はどうにでもなる。

そう考えての行動だった。

「でも、本当に良いのかい?これをやってしまったら、簡単には戻れないと思うけど。」

僕と向かい合つて椅子に座つて、マーリンは笑う。

「いいさ。みんなを傷つけないで済むなら。」

「もうすでに私が傷ついているんだけど、そこについてはノータッチ?」

「悪いとは思っているよ。だけど、こんなことを頼めるのは君だけなんだ。」

「分かつているさ。これだつて信頼だろう？」
僕にはできない。

僕に出来るのは、この迷いを捨てること。

そして、皆に危害を加えないこと。

二つ目のそれは、僕がこのカルデアを離れることで達成される。

一つ目はその後だ。

だから、まずはそれを実行したのだった。

「だが、分かつているんだつたら、次に会ったときに良いから、アプリコットを淹れてくれると嬉しいね。」

「あれ？ マーリンつて紅茶飲んだっけ。」

「紅茶は飲まないけれど、ほら、私は夢魔だろう？」

「そうだね。」

「だから、アプリコットが好きなのさ。」

「なるほど。流石だね、洒落てる。」

「こんな軽口も、ある程度の友愛と取つてみても良いのだろうか。」

「ああ、こうでなくっちゃ。別れくらいは明るく笑顔！ 泣き顔なんて、嫌いだからね。」

「僕を口説こうとしないでよ。」

「良いじゃないか。明るく、だよ。」

そう言って、頭を撫でられた。

乱雑に優しく、くしゃくしゃと紙に指が絡まる。

「……………優しいね、マーリンは。」

「残酷なだけさ。ともあれ、これで君の悩みは一つ消えるはずだ。だけど私の悩みは増える。」

「心配してくれているのかな。」

「当たり前だろう、自分の主の旅立ちなんだから。」

そう言って、目を細める。

なんだか、しばらく会っていない父にあったような気持ちになった。

「大丈夫だよ、心配しないでも。みんなの前から居なくなれば、傷つけなくて済むんだから。」

「全くだ。一番合理的だね。私からすれば、合理的と云うのはいささか気分が悪いけれど。」

「嫌いになったかな？」

「まさか。」

マーリンは笑う。

だけど、僕は笑えない。

こんなことを計画しておいて、責任感もへつたくれも無いけれど、だけど、ここで笑ってしまったら、自分でも分かかっていない何か壊れる気がした。

「そろそろかな。」

マーリンは立ち上がる

「そうか。…マーリン、今までありがとう。縁があつたらまた会おう。」

「契約したんだ。きつとまた会える。」

「そうだね。」

「どこか、送って欲しい希望の場所はあるかい？」

「無い。今の自分を見ても、親は悲しむだけだと思うから。」

「それじゃあ、マスター。最後に私の恨み節だ。」

未だに笑う。面を被っているようだ。

「君はきつと後悔する。苦勞をして、悲しみもするだろう。だけど、それは本当に悲しい事かな？」

「そうだね、でも、全部、今だ。今、僕がそれを体験してる。だから断言しよう。これは悲しいことさ。」

今、全ての罪を体験してる。

だから。だけど。

「きつと、俺の運命は、とつくの昔に狂っている。」

2-4

「こんな僕でも、大切なものを失えば、善人にはなれるんじゃない？」

「俺はもう、人を殺した。資格がないさ。」

「それは、リスクから逃げているだけじゃないのかな？」

「そうだよ。これだけ僕は戦ったんだ。普通に縋って何が悪い。」

「普通に縋って、普通に生きて、普通に死んでいく。そんなものなんて、我楽多と変わらないと思うよ。それに固執することも、ね。」

「だったら俺はガラクタで良い。」

「臆病だね。」

「悪いかな？」

「悪いだろ。それでも人類を救ったマスターなのかな？」

「そう、そこだ。」

「何が？」

「僕を縛っているのは、きつとそれなんだよ。」

「人類を救ったってやつ？」

「それ。本当に人類を救ったか、なんてわからないじゃないか。」

「そうかな？じやあ、あのドクターの慌てよう、あと例の魔神王の話はどうするのさ。」
「きつと、俺を陥れるための一連の芝居かもしれない。僕が騙されたせいで、ロマンやゲーティアも殺しちやっただけ。」

「ゲーティアは死ぬべきだった。だって、人類を殺そうとしたんだよ？」

「なんとか、改心をさせる方法だってあったはずなんだよ。人間の温かさって言うのは、その為のものなんだから。」

「それは人間にしか通じないでしょ。」

「でも、その道を進む前に諦めて、逃げ出そうとする俺に蜂起せず、放棄したのは僕なんだ。」

「難儀だねえ、俺も。」

「そうだろう？そんな君だ。」

2—5

目が覚める。

目に映るのは、一年間にわたるサイクルで見慣れてしまったカルデアの部屋じゃない、薄く埃の積もる汚れた協会の中だ。

「……………」

三日前に目が覚めてみると、既にこの教会の中だった。

つまり、マージンと別れてからは、三日が過ぎた。

一応、或る程度の金銭は持ってきたが、元々小食で燃費の良いことがあつてか、あまり食事に不便はしていない。

三日間此処に居たが、人が来る気配も無く、それ以前に人がここに来ていた霧囲気が無かつたので、ここを拠点にさせてもらつていた。

住めば都という言葉を聞いたことがあつたけれど、この教会は典型的なそれだった。

埃っぽいのが気になるけれど、我慢すれば何とかなることだ。

問題はここから、どうにかして生活しなければならぬことだった。

改めて、彼らの偉大さを知る。

「……………まあ、とりあえずおはよう。」

自分とは思えない自分へとあいさつして、体を起こす。

まずは、働き先だ。

そう思つて歩き出す。靴も服も、近くの公園に夜の間に出て洗つた。

もう乾いているので、それを着て、協会の外へ出た。

「……………」

曇りだった。

今にも雨が降り出しそんな黒い曇天である。

日差しが無いのが少し寒かった。

そう言えば、まだこの地域の名前を聞いていない。

だが、公園の近くの看板に、日本語で何かしら書いてあったのは覚えている。暗くてよく見えなかったので、地域は分からないにしても、日本という事については確定のようだった。

辺りは森。

それなりに暗い。

公園のあつた方向に向かって、とりあえず歩く。

しばらく歩いて、公園に着いた。

夜の閑散としたそれとは違い、ベンチで座つて日に当たる御老体や、砂場で砂を積み上げては崩し、暢気に笑っている子供姿がちらほらと見えた。

こんなに寒いというのに元気なものだ。

件の看板は東側。

他の人たちが喋っている言葉は日本なので、予想は違っていないらしい。

声のトーンから察するに、西日本の地域だ。

僕の住んでいた場所よりも南である。

どうも違うと思った。

雰囲気に活気があふれている。

俺の町よりも人が温かい。

思っていたよりもいい場所に着いたらしい。この雰囲気は嫌いじゃなかった。

そんな街の空気を浴びながら歩いて、看板が見えてきた。

道路標示の青い看板。

方向を示す矢印やら距離、主な施設の位置なども書かれていた。

その中から、名前を見つける。

「えーつと……冬と木、フユキ、かな？」

おしやれな名前だ。

そんな名前の町は聞いたことが無い。

聞いたことが無いという事は、どうやら僕の故郷からは遠いらしい。

好都合。

「……まあいいか。」

今はとりあえず、進む方向の一つや二つ、決めなければならぬ。

方向を示す看板を眺めて、考える。

「新都と深山町、か。」

どちらがどのような特徴を持ち、どちらの方が便利なのかとか、そう言ったことは分からない。

「……………うーん。」

少し考えたが、天啓は下りてこなかった。

「まあ、とりあえずコッチかな。」

結局は直感。

新都を出る方向、深山町の方に向かって歩く。

川を越えて、街の風景がガラリと変わった。

歴史的な建物が増えたのが、そう感じた原因だろう。

新都にあつた高層ビルとは違い、少し昔の建物が所狭しと並んでいる。

そんなこんなで深山町に着いた。

「今日とつてこんな感じなんだろうな……。行ったことないけど。」

そもそも、こういう歴史的なモノに触れるのは、この一年でのが初めてだった。

だから、然程興味が無い。

外国に比べて、日本のものが特殊だというのは分かるが、だから何だというのだろう。

少し特徴的なだけで、特別扱いするのもどうかという気持ちがある。

そんな風に自分に重ねてる問題を処理出来たらどんなに楽か。

「……そんな楽じゃないよな。」

こんなになるまで思い込んでいることが、楽なはずがないのだ。と、鼻に何かが当たると、

拭ってみるとそれは水。

雨が降ってきたようだ。

今のところはひどくなる様子は見えなかったが、これからどうなるかはわからない。雨宿りでもしなければならぬだろう。

とりあえず、近くにあった家に入る。

門を通って、庭を抜けて、玄関前まで着いた。

玄関の扉横にあった、備え付けのチャイムを鳴らす。

「はい、ただ今！」

そんな声と共に、足音が此方に近づいてくる。

数秒後に扉が開いて、少女が顔を出した。

濃い紫色をした不思議な雰囲気少女。

「この家の者に何か御用でしょうか？」

「すいません。用という訳では無いんですけど、雨が降ってきたしまったので、雨宿りできませんか。」

「ああ、はい、どうぞ上がってください。」

僕みたいな怪しい奴のこんな胡散臭い頼みにも、快く答えてくれた。きつと純粋ないい子なんだろう。

「こちらです。」

そう言つて、少し先に進む彼女の後を付いて歩く。

普通の家と比べてかなり広い。家というより屋敷に近いと思う。

その建物の中を案内されて、客間らしき場所に着いた。

「少しお茶を取つてきますので、お待ちください。」

「あ、お構いなく……。」

言い終わる前に出て行つてしまった。

それにしても、今の日本にこんな大仰な個人宅があるとは思わなかった。

あの娘はこの家の娘なのだろうか。

なんだか、この家に住んでいる風にしては違和感があつた。

少し余所余所しいというか、玄関でも「この家のものに御用でしょうか」とかなんとか言つていたし、もしかしたら親戚やら関係者の類かもしれない。

だとしたら悪いことをした。

「……本当にどうしようもない奴だな、僕は。」

いつも誰かに迷惑をかけて、無意識の悪意を振り撒いて、災厄が歩くように生きていく。

きっと僕さえ居なければ、あのままゲーティアの人理焼却が成され、皆が生きる希望を抱くことなく楽に死ねたかもしれないのに。

世界を救ったことに意味があるのか？

きつと意味はない。

もしかしたらこの世界は人理焼却される直前に見ている理想なのではないかとさえ思う。

そうだったらどんなに楽だろう。

全部夢で、全部幻で。

だが、もしそうだったらマシユとのあの記憶もなかったことになるのだと思うと、やはりそんなにいい物でも無いらしい。

それによく考えたら、死ぬのが嫌で戦ったのに死んだらダメではないか。

元も子もなくなる。前提の崩壊だ。

どうやら相当に精神がやられているらしい。

「……………もういいや。」

とりあえず、久々の屋内の床。

何も考えることも無くゆっくりとしたかった。

2—6

「……………ん?」

目が覚めた。

目が覚めたという事は、即ち数瞬前まで寝ていたわけで、つまり人様の家に入り込んで勝手に寝始めた不届き者という事に……

「お、目が覚めたか、あんた。」

廊下の方からそんな声がして、意識がそちらに持つていかれる。

「相当疲れていたみたいだったから、しばらく休んでもらおうと思つてな。」

そこには赤毛の少年が居た。

優しい目をして、優しい声をした、不思議な雰囲気少年。

「大丈夫か?」

「……、はい。大丈夫、だと思えます。」

「そうか、外はもう暗いから、うちで飯でも食べてくと良い。」

「はあ!」

外を見ると、確かに暗闇に包まれていた。

嘘だろ、ここに来たのは午前中のはずだぞ。

という事は、少なく見積もっても九時間は寝たという事になる。
いや、それよりも。

「というか、いや、悪いですよ。雨宿りさせてもらった挙句に夕飯までごちそうになる
とか……。」

「見たところ数日は何も食べていないような奴を放っておけるわけないだろ。もうそ
ろそろできるから食べて行け。聞きたいこともあるし。」

恐ろしいほど面倒見が良い。

きつと人を怠惰へと導くのが得意なタイプの人間だ、油断ならない。

すると、僕の警戒とは裏腹に少年は人懐こい笑みを浮かべた。

「あ、自己紹介がまだだったな。」

「ああ、そういえば。僕は藤丸です。藤丸立香。」

あ、反射的に答えてしまった。

別に悪いという訳では無いけれど。

なんて、暢気なことを考えている僕に少年は言った。

こちらの気など知らずに。

ただただ純粋な好意と誠意を主成分とした残酷さで。

「そうか。俺の名前は衛宮士郎だ。」

「……………エミヤ？」

「ああ、そうだ。宜しく、藤丸。」

それぞれの思想、それぞれの理想

3・それぞれの思想 それぞれの理想

3—0

エミヤ。

衛宮。

「衛宮……衛宮か……」

夕食に呼ばれて屋敷の廊下を歩きながら考える。

少なくともカルデアに入る前の僕の周りでは聞かなかつた名だ。

それなりに珍しい名前であるのは確かだろう。

だから、連想せずにはいられない。

かつての友人。

切り捨ててしまった彼の顔を。

黙々と淡々と、敵を切り伏せていく彼の姿が脳裏を過る。

彼……衛宮士郎はあの英霊の血縁者だろうか。

それとも、もしかしてもしかすると、子孫という事もあるかもしれない。

そう思ったのは、きつと目だろう。

目が似ているのだ。

悪を糺し、正義を尽くす。

そんな意思を奥に燃やす瞳が、どこまでも似ている。

凜として、静を見据える彼ら。

どうしたって、重ねてしまうのは必然だった。

「……………」

果たして、彼に会ったのは偶然だろうか。

どうも出来過ぎているような気もする。

「絶対に忘れさせない。」「お前は苦しむべきなのだ。」「人殺しへの罰だ。」

そんな世界の意味を感じる。

世界の意味。

「……………世界の意味、ねえ。」

シェイクスピアの影響だろうか。

自分からそんな詩的な意見が出るとは思えなかった。

思わず苦笑する。

と、ここで気付いた。

「……………なんだ。」

笑えているじゃないか。

顔の筋肉が、その形に動いている感覚がある。

苦笑とはいえ、笑みは笑み。

カルデアからここまで、笑うことができなかつた。

だから笑えたことは大きな進歩だ。

そこで油断して。

窓の外の暗くなつた窓を見た。

見てしまった。

「……………」

無表情の僕の顔が映っていた。

どうしてだろう。

明らかに笑っているはずなのに。

窓ガラス。

黒い鏡の向こうが笑う。

僕の顔が醜く笑う。

『君は失敗作だ。』

『もう笑えることすらできないじゃないか。』

『人を殺した君ほくに人を笑う資格なんて残されていない。』

『ならば、自分を笑わず、誰を笑う？』

『誰を馬鹿にするというんだ？』

『誰を蔑み堕とすんだ？』

『もう自分しか残っていないだろう。』

『だから自分を笑ったんだ。』

『なのに』

『其れすら出来ない君ほくは』

『きつとただの欠陥品だ。』

3—1

ハツとして、目が覚める。

暖かい。

これはストーブだろうか。

後ろを見ると、電気のストーブが点いていた。

どうやら、また悪夢のようだ。

これから僕は、一生僕を苦しめるつもりなのだろうか。

「……………はいは」

和室だ。

それなりに広い。

壁のところにある柱の真ん中より上、鴨居の辺りにかけられている時計を見る。

時刻は午後八時。

なぜこんなところにと、そこで思い出した。

「…そつか。夕飯後に寝ちやつたんだ、僕。」

あの後。

夕飯を頂いてしまった僕は「質問があるから待っていてくれ。」と片づけを始めてしまった彼を待っていたところ、久々の温かさで寝てしまったらしい。

当初は、食事中に紹介された桜ちゃんも居たはずだけど、彼女はもう帰ったらしい。

簡単明瞭な回想終了。

人様の質問を放り出してなんて失礼なことを……………。

なんて頭を抱えていると、僕の右側の部屋の奥。

据え付けられたキッチンで何かしらの作業をしていたのであろう。衛宮君が顔を出した。

「お、やっと起きたか。魔されてたから心配したんだぞ。」

「……衛宮君。」

「まあ、しょうがないか。体もボロボロ、服も汚れて、かなり疲れていただろうから。」

「…ゴメン。」

「良いよ、別に。」

そう言つて、こちらにお盆の上に乗せた茶を運んできた。ここでふと、少し前の記

憶を思い出した。

「……そういえば、僕に質問があるんじゃないやなかつたつけ？」

「ああ、そうそう。少し聞きたいことがあつてさ。いいか？」

「……答えられることならいいけど。」

何だろうか。

こんな怪しいものに質問と言うのも当たり前のようなのだが、それにしてもはやけに衛宮君が真剣だ。

「でも、それにしたつて、こんな僕に質問するようなことも無いように思えるけど。」

「いや、そんなことは無いぞ。色々聞きたい。」

「…色々つて。」

「俺の家に雨宿りに入ったのも、きつと何かの縁だろうし、そういう細かい縁は大事にするべきものだろう？」

衛宮君はそう言った。

それについては大いに同意だ。

僕もそれによつて、一つしかない命を何度も救われた。

最後の日だつて、縁がなければ勝てなかつただろう。

「……そつか。」

「ああ。…それで、質問なんだが、いいか？」

「うん、構わないけど。」

「手の甲にあるその刺青みたいなのつて、令呪で合つてるか？」

3—2

何故、彼がこの事を知っているのだろう。

一般人には知られていないはずだ。

魔術協会や聖堂協会が行う神秘の秘匿によつて、聖杯戦争その他魔術については、一般人には知れ渡っていない。

だから彼が知っているはずがない。

なぜ知っているんだろう。

昨日の夜にそう考えて、そう聞いた。

「……なんで知つてるんだ？」

「ああ、そのことか。」

そりやあそうだと、そう言つて納得するような、やつてしまったというような顔をした。

「……今から一年くらい前に、俺も聖杯戦争に参加したんだ。」

聖杯戦争の参加者。

という事は、恐らく彼は魔術師か。

彼の間隔で今から半年前から一年前という事は、二年前くらい。

という事は、話に聞く『冬木の第六次聖杯戦争』だろうか。

いくらか前に、Dr. ロマンからその話は聞いた。

「少し前に日本の冬木で聖杯戦争が起きたんだ。本当に一年くらい前の話なんだけど、驚くことに冬木では、その十年前にも聖杯戦争が起きているんだ。つまり僕が前所長と参加したものを含めても計三回、冬木で聖杯戦争が起きていることになるんだ。ある意味聖地だよ、あそこは。」

そんなセリフを思い出す。

アニメスフィア家が勝者として聖杯を勝ち得た聖杯戦争が大体、十から二十年前。

そこから、三十年間の間に三回の聖杯戦争が起きた場所。

僕の間隔で言つたらそんなに多くない気がするけれど、僕のケースは異例だという事

を考えると、確かにあの規模の戦いが三回も起きるなど、どうして神秘が露見していないのか不思議なレベルである。

「それで、その時にいろんな人に迷惑をかけて、いろんな人の手を借りながら、それでも何とか勝つたんだ。」

「……なら、衛宮君は聖杯を手にしたの？」

「いや、壊した。」

「は？」

聖杯を壊した？

願いを叶える万能器ではなかったのか？

そもそも、そんな簡単に破壊できるものとも思えないのだが…

「いや、それが俺にも良く分かってないんだけど、普通の聖杯とは違ったらしいんだ、この聖杯ってというのは。」

「違うってどういうこと？ 願いが叶わないとか？」

「いや、違う。人間の願いをマイナスの形で叶える願望器ってだけだ。」

人の願いのマイナスを叶える。

オケアノスのメディアアの発想のようなものだろうか。

「世界は滅びる、即ち敵は居なくなる、つまりは無敵である。」

そんな感じの。

「うん、まあ、そんな解釈で良いと思うよ。……あれは汚れた聖杯って呼ばれていた。」

「汚れた聖杯……。」

綺麗を白とするなら、汚れとは黒。

汚れた聖杯。

黒の聖杯。

「何回か前の聖杯戦争で使われた聖杯が、何ゆえかの原因で変容したらしい。」

汚れた原因は不明なんだそうだ。

衛宮君はあきれた様な口調でそう言った。

「というか、俺に願いとかが、そんな大層なものも無かったしな。」

「……なら、何で聖杯戦争に参加したの？」

「いや、俺は自分から参加したんじゃないよ。巻き込まれたんだ。」

「巻き込まれたって……」

「まあ、いろいろあつてな。」

いろいろあつた。

〃いろいろ〃とは、恐らく一点の曇りもなく〃いろいろ〃で、その言葉にどんな意味が込められているのか、どのような出来事、どのような重みが込められているのか、と

てもじやないが分からなかった。

「……ん？」

そこで、はたと気付く。

「なあ、衛宮君。聖杯戦争って、途中で止めることもできるって聞いたんだけど……」

「ああ、その話な。……俺には志と夢があったから。」

「でも願いは無いって……」

「願いじゃないよ、これは夢だ。」

真剣な顔をして、彼は語る。

「それに、そんな風に夢が叶っても、なんか嫌だろ？」

「……どんな夢か聞いてもいい？」

知りたいと思った。

彼みたいに強い意志を見つめる人がどんな願いを持って夢を見るのか、興味を持った。

「あ……」

衛宮君は照れくさい顔をする。

まあ、そんなものなのだろうな。

夢と言うのは恥ずかしいものだ。だが、だからこそ美しい。

そんなシェイクスピアの言葉を思い出した。

「自分でも心底恥ずかしいと思うし、人に言ってもいいのかとすら思ってることなんだけどさ。」

照れくさそうに、だけどしつかりと強い目をして。

彼は言った。

「俺はさ、正義の味方になりたいんだ。すべての人を助けることのできるような、そんな正義の味方に。」

3—2

成人してから名乗るのが難しく、最も非難されやすいであろう職業、暫定一位。

正義の味方。

その定義は人それぞれ、かなりの数を占める。そしてそれはきつと、人の理想の具現だ。

心に存在する感情の形態などと、そんな曖昧で抽象的な産物だけれど、それに縋る事によつて人々は平穩を保つのではないだろうか。

悪行を踏み止まり、弱きを助け、正義を成す。

その原動力。

そしてその「正義」もまた、人それぞれ。

例えば “悪を懲らしめるヒーロー”。

例えば “謎を解き明かす頭脳”。

例えば “この世の神秘を守る義務”。

それが時に悪となる事もある。

人それぞれなのだから、そうなることもあるだろう。

悪行を踏み止まり、弱きを助け、正義を成す。

それは限りなく自分基準だけれど、なんせ全人類は七十億人。どんな人物がいるかわからないし、どんな人物だって居るだろう。

だからきつと、正義は両側面なんだ。

人との違いによって、善にも悪にもなる。

自分の正義が正しいのか。それとも間違いなのか。

それを決めるのは自分でなく、それを見た赤の他人だ。それ故、世界中で戦争が起こり、他人を排他し支配しようとするのだろう。

だから価値観の違い、反りが合わない原因とは即ち他人との正義の相違にある。

と、ここまでをまとめ、僕の主張をできるだけ簡潔に表現するとしたら、だからきつとこうなるだろう。

他人のためとか、人類の革命とか、そんな民主主義を気取っても、最終的には正義の

味方とは、圧倒的なエゴイズムである。

3—3

昨日、衛宮君の屋敷から帰るときに「明日、また家に来て、藤丸の事情について話してみてくれ。色々あったみたいだし、少し話を聞きたいから。」と言われた。

こりゃあ、桜ちゃんが惚れるのも当たり前か。

そんな風に納得した。

そういう訳で僕は今、衛宮君の屋敷に向かつて、教会から出て歩いてきた。

まだ朝の八時。

薄霧のかかった街中、歴史的な建物の立ち並ぶ住宅街を、僕は走っていた。

別に何か理由があつて走っていたとか、そんなことは一切無く、ただ運動がてらに軽くランニングをしながら向かったというだけである。

自分の事だけど、心底暇な奴だな、僕。

こんな時間に来られても、衛宮君も迷惑だろうに。

教会を出てから、すでに十五分ほど走っているが、冬の寒さに自分の汗を掻かない体質も相まって、あまり汗をかいていない。

とはいえ、さすがに少し疲れてきた。

今回の一人での逃避行には、あまり服を持つてくるのも邪魔になるからと、カルデア

の制服くらいしか持つてきていない。

汚れがすぐに取れるし、それなりに繊維も丈夫だから役立ってはいるが、今回ばかりはその繊維の丈夫さが仇となった。

少し繊維が固くなり、走りにくい。

これならば、運動用に戦闘服でも袋に入れて持つてくればよかった。

とはいえ、後悔先に立たず。

どうにもできないことを考えても仕方ない。

あの時の自分は間抜けだったと諦めて、そのまま走り続ける。

そこからまたしばらく走って、衛宮君の家の塀が見えてきた。

「……にしても、相変わらず大きいな。衛宮君の家。」

なんだか、『や』の付く仕事の人達の仕事場のような風の屋敷である。

「入るのが億劫だよ、全く……。」

とはいえ、今日は僕が呼ばれた側だ。入らない訳にもいかない。

まだ朝早いことを気遣って、静かに門を通る。

確か、「いつ来ても構わないから」と、そう話した記憶がある。

とはいえ、こんなに早く来るとは思っていなかっただろう。悪いことをしたかもしれない。

家の玄関の前まで来たけれど、人が居るとか、生活をしている気配がない。

まだ寝ているのだろうか。

昨日会った時にはそんな印象はなかったけれど、もしかして彼は朝に弱いのだろうか。

そこで待っていても何か起こるわけでは無し。ベルを鳴らす。

一分待っても二分待っても、さっぱり反応は無かった。

これではどうしようもないし、一度帰って出直そうかと体を半分振り返らせた辺りで、何かの音が聞こえた。

恐らくこの屋敷の向こう側。

兵の向こう側に見えた蔵の辺りから重い音が聞こえた。

「……なんだろう。」

何か作業中だったのだろうか。

ともかく、そこに誰か居るならちようど良い。

衛宮君じゃなくとも、そこから衛宮君に繋いでもらえばいい。

そう思って、家の裏側に向かった。

予想よりも少し広い庭を通って、裏手に回ると、案の定、倉らしき場所から衛宮君が

出てくるところだった。

「衛宮君。」と呼びかけると、彼は振り返った。

僕を視界に収めると同時に、少し微妙そうな苦笑を浮かべる。

「おはよう、藤丸。」

「うん、おはよう。朝早くにごめんね。」

「いや、構わないさ。何時でも良いって言ったのはごちだしな。」

「いや、それについては本当に悪いと思ってるんだよ。でも寝泊まりしている教会に入らなくてきちやったからさ。バレないように出てくるの大変だったよ。」

アハハと笑ってそう言うと、今度は信じられないものを見るような目になって、次いで溜息を吐いた。

「……まあ、その辺りの話も後ですか。」

僕はそうだねと返して、屋敷の表側に向かった。

3—4

玄関から上がって、そのまま居間に通されたそのまま待つのでは暇だったので、衛宮君の朝食中に他愛のない話をして時間を潰した。

それこそ、好きなもの、嫌いなもの、聖杯についてとか、英霊の皆と話していたようなことだった。

「それで、三人目、一番最後の彼はこう言った。『俺の勝ちだな。俺の彼女は性格もルックスも最高。唯一の欠点は、のどぼとけが異常に出ていることぐらいだ』ってさ。」

「ははは！面白いな、それ。実話か？」

「ああ、少し前にアメリカで。」

「本場のそれか。さすがだな。」

なんて、そんな軽口も叩けるくらいの信頼を置くことはできた。

この時ばかりは嫌なことを忘れることが出来ていたんじゃないかと思う。だがそんなことを意識している時点で、きつと忘れることなく心に深く罪悪感が根付いていたんじゃないだろうかとも思う。

なんて、こんな思考を言葉にして書くことで、僕は何とかして言い訳を探しているのかもしれない。

と、こんな考えがずっと頭を巡る。

もはや自分にも疑心暗鬼になっているらしいことだけは確かに分かった。

3—5

しばらく話して、衛宮君がああ話を切り出してきた。

「それでさ、藤丸。昨日言っていた話なんだけど。」

「ああ、僕がどう言った経緯でここにいるのかって話？」

「ああ。話してもらえないか？」

「別に構わないよ。秘密とかもあんまり無いし。心配なのは信じてもらえるかどうかとてとこだけど。」

嘘だ。

実際、カルデアの話をどこまで話していいのか分からない。だが、それについて話さない事には、事態の前進はない。

ない。

だったら、真実を話すことが必須だろう。

その真実も、夢だったといわれたら信じてしまいそうな奇抜なものだけれど、それでも面白い話ではあるから、面白くないよりはマシだろう。

だから、嘘だと思ってくれて構わない。判断はすべて衛宮君に任せよう。君が嘘だと思えばそれは全て嘘で終わるし、本当だと思ってくれたなら、それはそれで話した甲斐があるというものだ。

そう前置きをして、僕は彼に話を始めた。

一年前、カルデアで起きた最初の爆発から、冬木市街、オルレアン、ローマ、オケアノス、ロンドン、アメリカ、キャメロット、バビロニア。そして最後のソロモン神殿。すべての特異点で起きた出来事を、包み隠さず、出来る限りの全てを話した。

その間、彼はとても真剣に僕の話の話を聞いてくれたし、僕もそれに合わせて喋って、それなりに詳しい説明が出来たのでは無いかと思う。

その後、半日くらい掛けて何とか、ここ一年の人理修復についてのエピソードを話し終わった。

「……………うん、これで終わりかな。僕のここ一年の活動っていうのは。」

「そうか。……………大変なことをしてたんだな、藤丸。」

「……………信じてくれるの?」

まさかこんな簡単に信じてくれるとは思わなかったけれど。

「ああ……………まあ、俺も一応魔術師だからな。嘘のような体験なんて、何回もしてきたから。」

「そっか、ありがとう。」

「別にいいよ。ただ、一つ分からないことがある。」

「?」

「藤丸が、どういう経緯を辿って、何があつてこんな処に居るのかっていう今回俺が聞きたかったことが全く以て分かっていない。」

「……………ああ。」

そのことをまだ話していなかった。

というか、きつと、無意識に避けていたのだろう。

こんな話聞きたくも無いだろうしと、自分の中で答えを決めて、話すことから逃げていたのだ。

「……僕はさ、君みたいに正義の味方を目指したりしている訳じゃないけれど、それなりに責任感は強い方だと思ってる。」

いや、違う。

もうここにいる時点で、責任感なんてものは、僕には欠片も残っていない。

あるのはきつと、どす黒い人殺しと言う存在だけだ。

「だから、世界を救うならその時代の人たちは全員助けるべきだったんだ。誰一人殺すことなく、人種も性別も欠かさず、老若男女分け隔てなく、全員助けるべきだったんだ。」
衛宮君は黙って聞いている。

僕はそのまま続けた。

「だけど、僕が行った場所では沢山の人が死んだ。子供も死んだ、大人も死んだ、男も女も死んで、動物ですら死んだ。僕が殺したんだよ。皆を僕が苦しめて殺した。」

「……違うだろ。それは藤丸のせいじゃない。」

「そんなことは分かっている。俺のせいじゃないってことくらい、百も承知なんだ。」

「だったら……。」

「でも、なんでかな。きっと僕のせいなんだっていう気持ちだが、何時まで経っても消えないんだ。だって彼らは、僕がもつと完璧だったら死ななかつたんだから。」

「……完璧な奴なんて、この世にはいないよ。きっと、宇宙を探したところで存在しないだろう。欠点があるのが人間なんだから。」

「……うん、そうだよ。ただ、僕にはその欠点が許されないものなんだ。僕だけが損をするならそれで良い。だけどそれで、ほかの関係ない人たちが死んだんだ。だから、僕にはそれが許せない。」

「……藤丸」

世界を救って、その優越に浸って、一日も経たずにそれに飽きて、残ったものは後悔と酷いPTSDのような魔術王の呪いだけだった。

そんな僕を見ると、惨めで仕方がない。

世界を救ったのがこんな男では、誰だって幻滅するだろう。

「……PTSDって、そんなに酷い状況なのか？」

「いや、それについては僕一人で苦しめばいいだけだから、別にいいんだ。だけど、ここに来る数日前に、その発作で大切な人を傷つけたんだ。僕が苦しめばいいのに、僕が苦しみに耐え切れず外にそれを漏らして、あろうことか、この世で一番大切な後輩を傷つけた。だから、酷いっていうならそっちの方が酷いんだ。」

質問の答えになつていないような、彼からしても聞いても居ないような独白を、嫌な顔一つせず真面目に聞いた後に、どうも微妙な表情を浮かべてこう言った。

「そこまでしよい込むべきでもないと思うがな……。まあいい。一旦、その話は置いておこう。昼飯、食べていくだろ？」

「いや、悪いよ。それに僕、まだ地下で見つけた缶詰とかあるし……」

「いや、そんなところに病人を置いておく訳にもいかない。とりあえず食つていけよ。」
そう言つて、強引に押し切つた後、キッチンの方に歩いて行つてしまつた。

と言うか、病人？

体は特に異常は無いし、熱がある訳でもない。

なぜだろう。

その後、そんな思考を十分ほど繰り返したが、答えが出ることは無く、衛宮君の声にかき消されて、記憶の底に消えていった。

森羅万象不変に非ず

4・森羅万象不変にあらず

4—0

衛宮君がくれたお茶を貰って、一息吐いた。

「うん、ご馳走様でした。連日御馳走になって本当に申し訳なく…。」

「別にいいよ。今日は俺が呼んだんだし。」

「あ、そう。それだ。」

衛宮君が首を傾げる。

「なにが？」

「いや、何か忘れていたと思ったんだけど、なんかさつき話すことがあるって言っ
てな
かったっけ？」

「ああ、その事か。」

納得というように頷いた。

「どうやら彼も忘れていたらしい。」

「それについてなんだが、少し確認をしたい。」

「構わないけれど。」

「今、藤丸は何処に寝泊まりをしている？こっちに来て、まだ間もないんだろう？」
「あー……」

少し、言葉に詰まる。

「えつと……無許可で協会に入って雨風を凌いでいます、はい。」

「教会つて、あの山の方にあるやつか？」

「うん、確か冬木教会だっけ。」

「なるほどな。だからか、服が汚れているのは。」

「えつ、そんなにわかるほど？」

「いや、パツと見ではわからないけど、細かいところに泥が付いてるし。」

「良く分かるね、そんなの。」

改めて制服の裾やらを見ると、確かに細かい泥が付いていた。

「なんだ、この青年。オカンか。」

「うん、OK。大体わかった。」

「うん？」

「いやだから、あんなボロい教会にいるんじゃないやあこの季節は冷えるし、何より一年前の聖杯戦争で所々壊れていてな。老朽化も進んでいるし、いつ崩れるか分かったものじゃないな。」

いから、あまり入らないように連絡が町の方から来てる。」

「あ、そうだったんだ。じゃあ拠点を変えないと。」

「んー……うん。じゃあ、うちの部屋を貸そう。」

数秒悩んだようだったが、悩んだにしてはすんなりと、前からある程度決めていたかのように、衛宮君はそう言った。

「え？いや、話が全く見えてこないんだけど……」

「だから、このまま野宿させるよりはうちの部屋でも貸した方がマシだって言ってるんだ。」

「でも……」

「うちの屋敷はそれなりに、と言うか無駄に広い。幸い部屋は何個も空いているし、居候させるのも吝かじゃな」

「それじゃダメなんだよ！」

何とかして踏み止まろうとしたけれど、我慢できずに叫んだ。

優しくしてもらっているけれど、こればかりはダメだと、そう感じた。

「……君は……衛宮君は僕の話聞いていなかっただの？僕は近くの人を傷つけてしまうから、だからあそこから出てきたんだ。なのにここに住み着いたら、今度は君に迷惑が掛かる。なら、そうするしかないんだよ。」

「……………藤丸こそ、俺の話を聞いていなかったのか？俺は困っている人は助けたい質でさ、助けることが出来るなら何でも出来るような人間になりたいと思ってる。」

「……………」

「それに人と約束したからな。『限界だと言うならば、俺が貴方の代わりになろう。』つて、そういう風に。」

本当にそんな口調だったとは思えないけれど、彼がかなり頑固だとは分かった。

もはや病的なほどに。

「……………衛宮君、君のそれは病気みたいだ。」

「あー…それ、言われたな。知り合いの友人に。」

「それは約束した人？」

「いや、その人ではないけれど。なんて言うか……………そう、俺を救ってくれた恩人だ。」

「命の恩人？」

「それだけじゃないけどな。未来を救ってくれた人だ。」

そう語る彼の顔は、楽しかった記憶の詰まった箱を覗いて懐かしむような、そんな顔だった。

「……………衛宮君はその人の事が好きなの？」

「……………どうなんだろうな。唯一分かる事っていうのは、今は私用で海外に行ってるせい

つに、二度と会えない訳じゃないのにすごく寂しいんだ。」

「…それはきつと恋つてことじゃないの?」

「さあ?でも、俺は寂しがり屋だから。人と離れるのが辛いんだ。」

僕と話している間から変わらず、そう言つて優しく笑つた。

「……………なあ、衛宮君。僕たちは友人だろうか?」

「どういふことだ?」

「いや、ただの質問。と言ふか確認だね。」

「うん。…まあ、そちらの定義にも依るだろうけれど、少なくとも俺は、これは友人と言ふものではないだろうかと考えている。」

「……………そつか。」

なんだか救われた気分になった。

同時になんだか、久しぶりに出来た友人を前にして、肩の力がスツと抜けた気がした。

「なあ、衛宮君。頼みがある。」

「おう、なんだ?」

「僕は今、家出をして、得た住処を追われている。君の家に僕を置いては貰えないだろうか。頼まれることなら何だつてしよう。だからどうか、ここに置いてはくれないか。」

「ああ、構わない。幸い、部屋なら幾らでも空いている。好きなどころを使うと良い。」

斯くして、僕は衛宮君の家に居候をすることとなり、同時に新たな友人——今を生きる同年代の友人を得ることもできた。

確認してから頼んで、そこに付け込むような形になってしまったけれど、それでも心良い了承を受けて、衛宮亭の一室、東側の角部屋を借り受ける運びとなった。

僕はその日のうちに教会を掃除して、衛宮亭に着いたのは午後の六時だった。

4—1

「それじゃあ僕、最後に使ったところの掃除をしてくるよ。直ぐにまたここに来るとは思うけれど。」

そう言つて、教会に向かったのが大体午後一時過ぎくらい。

出て行くときに教会の瓦礫や亀裂に注意するように言われたけれど、そこまで瓦解が進んでいるという訳でもなく、それなりに綺麗な状態で修繕されていた。

ところどころ罅の入った壁があつたからそこだけ避けて、かなり綺麗に掃除することが出来た。

そして現在、衛宮亭玄関前。時刻は午後の六時だ。

どうも、この時期の夕方は冷えていけない。早く暖かい場所に入りたかつた。

一応、玄関前のチャイムを押して、それから横開きの扉を開ける。

「…お邪魔します。」

「お、帰ったか。早いところ居間に来いよ。もう料理ができるから。」
「うん、わかった。」

衛宮君がひよこりと廊下から顔を出してそれだけ言うと、すぐに引つ込んでしまった。

数日の内に何度通ったか分からないような玄関から居間への廊下を歩く。

居間の扉を開けると、良い匂いが香ってきた。

その匂いに次いで、視覚情報が追いついた。

居間のテーブルに桜ちゃんとうちやら顔を伏せて授業中の学生よろしく寝ている。婦人がいることが分かった。

「あれ？桜ちゃん？」

「はい、先輩から一通りの話を聞きましたので、挨拶に伺いました。」

眩しい笑顔でそう言った。

「これからよろしく願います、藤丸さん。」

「あ、いえいえ、こちらこそよろしく願います。」

お互いに頭を下げて簡単な挨拶を交わす。

彼方からの挨拶を返すと、ニコニコと嬉しそうに笑った。

うーん、美人である。

余所余所しきは感じるけれど、それでも純な笑みであることに間違いは無いだろう、見本のような笑顔だった。

「……それで、桜ちゃん。こちらのご婦人は？」

「ああ、藤村先生です。一応、先輩の保護者ってことになるんでしょうか。」

「建前上はな。結構古い付き合いだ。」

衛宮君が付け足す。

いろいろと複雑らしい。

それについては深く聞かないことにして、藤村と呼ばれた女性が起きるのを待つ。

かれこれ五分後、衛宮君が卓上に食材の載った皿を持ってきた辺りで、むくりと顔を上げた。

「……………あれ？もうご飯？」

「ええ、そうですよ。藤村先生。」

「そっかー……………」

そう言って、机上でゴロゴロとしている。

猫の様だとも思ったが、そう感じるより先に、どうもそれ以上の違和感が有る事に気付く。

誰かに似ているのだ。

雰囲気自体もそれなりに似ているし、顔もそっくりだ。

「……………あ、そつか。ジャガーマン。」

「ん？つてウワツ！もう来てたの!？」

僕の呟きを聞いて初めて僕に気付いたらしく、予想以上に面白い悲鳴を上げて飛び上がった。

うん、これはジャガーマンだ。とても良く似ている。よく聞けば、声色から声質まで、殆ど違いを感じなかった。まさか同一人物なんてことも無いだろうけれど、それでもこれほど似ているのは驚いた。

「初めまして、藤村さん。今日からお世話になる藤丸立香です。」

「…コホン。」

とワザとらしい咳に続いて

「…初めまして、私は藤村大河。君の話は士郎から聞いているわ。」

と、保護者らしい振る舞いを見せた。

後の祭りも甚だしかったが、少なくとも悪い人には見えなかった。

「これからよろしく、藤丸君。」

「はい、よろしくお願ひします。」

「うん、元気で良い。」

そう言つてにつこりと、優しいお姉さん風な笑顔を見せた。

「結構、苗字とか似てるしね。そういう意味でもよろしくう！」

意外とユーモアのある人らしかった。

「私の家族がここの隣に住んでるから、何かあつたらうちに来てね。」

とも言つていた。

意外と頼れる。

そうして自己紹介が終わつたあたりで、衛宮君が食事を運び終えたようで、畳の上に座つた。

「折角だから遠坂も紹介したかつたんだけどな。生憎、今は遠出中だからなあ。」

「遠坂？」

「先輩の御同輩で、とても仲良くされていらつしやる方です。現在は何か、私用でイギリスの方へと出向いていらつしやるようですが。」

と、桜ちゃんから丁寧な注釈があつた。

桜ちゃんのやけに深く座つた目が気になつたけれど、突つ込んではいけない気がしたのでスルー。

なるほど、イギリスというところから思い出した。

衛宮君の想い人か。

「へえ。その人にも何時か会ってみたいね。話を聞く限り面白い人ではあるみたいだし。」

「んー……うんまあ、面白いと言えば面白い、かな?」

「?やけに煮え切らないけれど。」

「いや、気にしないでくれ。それより、先に食事を食べよう。」

そう言つて、机の上に色々と食事を置いていく。

数日前からのそれよりも、少しばかり豪華だった。

4—2

有難く御飯を受け取つて、出来る限り綺麗に食べた。

小食の僕には少し多かつたけれど、それでも何とか食べ切つた。

その後、今後ここに住むにあつて、やつてほしい事や禁止事項、その他当番などを簡単に決めて、今日は解散となつた。

「藤丸さん。それではお休みなさい。」

ペコリと頭を下げて帰つて行く桜ちゃんを見送つて、僕は割り当てられた部屋へと戻る。

風呂には最後に入ることになっているし、それに少し、考えたいこともあつた。

やはり無駄に長い廊下を歩いて、部屋の真ん中にある机の近くに寝転んだ。

少し考える。

僕はこれから何をすればいいのか。

この屋敷に住む上でのルールについてもそうだが、それ以外。

ここに来たもともとの目的についてだ。

「何がしたいんだろう。」

口に出すが、届く先は無い。何もない空間に響くだけだった。

あの時——四日前。

あの時は、僕は何をする心算だったんだろう。

ここに出てきても、僕の出来ることなんてあっただろうか。

あそこを出てくることで目的は果たせるとしても、その後のことは全てマーリンに任せてしまっていた。

それ以外にも、今思い出すと後悔が山ほどある辺り、僕はまだまだ弱い。

自分の過去の判断を公開という形で否定するなど、そんなことをする僕はやはり、人間にも成り切れない愚かな化け物では無いだろうか。

と、記憶が急に蘇った。

オルレアン。その地方の、確か森を抜けた先の町での出来事。

村を救って、傷一つなく竜を打倒して、そして帰ってきた僕らに少年たちは言った。

『化け物だ。』

『あんなに強い竜を倒せるもんか。』

『次は僕らを襲うつもりか。』

そんな言葉を次々に口にしました。

その後、その子供たちは親御さんに拳骨を食らっていたけれど、子供が正直なのはいつの時代も同じなのだなぁと、その時感じたものだ。

きつと口に出さないだけで、村の大人たちも似たような印象だったに違いない。

そうでなければ、ジャンヌも昔に魔女狩りの憂き目にあうことも無かったはずなのだ。

そう考えると、化け物という自己評価も思いのほかしつくり来た。

ともかく。

もうあそこには戻らないにしても、これからの方針も決めないといけないことは確かだった。

これからこの町で生きていくにしても、一定期間で転々とするにしても。

一瞬、死んだ方が楽になるのではないだろうかとも思っただけれど、それでは衛宮君の迷惑になるし、それをやってしまっただけはこれまでの一年や、それに付き合わせたマシユの一年が無に帰してしまおうので、それについては何とか避けたかった。

「どうするべきかなあ……………」

相変わらず、空虚に響く声だった。

4—3

いつかの記憶の夢らしい。

普段の悪夢と違って、それが夢だという事は分かった。

カルデア。

数日前までは日常を過ごす場所だったその施設の食堂で、ひねくれ者の復讐者が座っていた。

「……………」

一言も発さず、ピクリとも動かない彼に、僕は声を掛ける。

「なあ、アンリ。何を見てるんだ?」

「お? ああ、マスター。彼奴だよ、彼奴。」

彼は見ている方向に指を向ける。

その方向を見ると、マシユと何やら食事をしている、もう一人の復讐者が座っていた。何を話しているのだろう。

何時になく優しい顔をした、彼の姿が映った。

「……………あいつさあ」

と、アンリが話す。

「すつげえ人間してんだ。」

「どういうこと？」

「マスターの相棒の嬢ちゃんとかマスター本人とか、そういう人間と喋るときにだけ、彼奴はああいう笑顔を見せる。なんともまあ、人間らしいじゃねえか。」

「そうかな。」

「そうさ。」

「そうだったのか、気付かなかったなあ。」

「おっと。んじゃあ、今の話は忘れてくれや。彼奴だってマスターにはその事、知られたくないだろうしな。」

「ああ、うん。それは構わないけれど、アンリ。さっきのあれはどういう事だい？」

「さっきのあれ？」

「あの、『人間してる』ってあれ。」

「ああ、あの事……。いや、だつてよ。マスターとか、彼奴が少なからず憎んでいない相手に対してのみ、そういう表情を見せるなんてのは、なんて言うか……。人間になり切れてないみたいないメージがするんだよ。こう『人間社会に溶け込もうとする怪物』みたいなの。」

「……なるほど。」

「まあ彼奴も『この世^極全ての悪』みたいなのには、言われたくなんてないだろうけど。……でも、俺みたいな不器用な奴は溶け込もうとしても溶け込めないからさ。彼奴みたいに上手くやれてる奴のことを見ると」

僕は不穏な空気を感じて彼を見る。

「殺したくなつてくるんだよな。」

そう言つて、濁つた眼で、泥のようにニタリと笑つた。

4—4

いつの間にか寝てしまつたらしい。

予想よりもすぐに目が覚めて、時刻は午後の九時過ぎ。

起きた辺りで衛宮君が呼びに来たので僕は急いで風呂に入つて、それも終わつて現在は、先ほどの部屋に帰つてきたところだつた。

「……なんだか今日は疲れたなあ。」

カルデアからある程度の金銭で、近くのコンビニで寝巻の類は買つてきた。

本手に持つてきていてよかつた。

これがなければ死んでいたかもしれない。

とか、そんなことを考えながら布団を敷いて、寝る環境はできた。

あとは寝るだけなのだが、これがなかなか難しい。当たり前だ。

先程までしつかりと、夢を見るほどぐっすりと寝ていたのである。

たかが一時間かそこらで寝れるはずも無い。

仕方がないと、廊下に出る。そのまま少し外に出ようかとも思ったけれど、廊下がやけに明るいの気に気付く。

どうやら月が出ているらしい。

空を見ると、満月が空中に浮かんでいた。

「……………」

何かに似ている。

見覚えがあるのだ。

形が丸くて、周りの色と違い、空中に浮いていて、泣いているような光を放つ。

「あ、そっか。」

聖杯の穴だ。

周りの色が違うあたり、聖杯の穴の中に入って外を見ると、実はこうなっているんじゃないだろうかという想像図が空に広がっているようでもあった。

不吉な物なのに、なんだか懐かしく思ってしまった、いよいよ嫌になりそうだった。

「……………」

今、彼女は何をしているのだろう。

あそこから逃げることに必死で、彼女に謝罪も出来ない今の僕にはそんなことを考える資格も無いだろうけれど、考えずにはいられない。

笑っていてくれると、此方としても救われるし、僕がいなくなっても笑えているのだったら、迷惑を掛けることが無くなった分、こちらに出てきた意味があるのではないだろうか。

「……………あそこにおいて、僕に出来ることなんて無かったんだ。だからこっちに出てきて、正解だったんだ。」

「そんな訳があるか、たわけ。」

僕は今、窓の近くに座っているから、後ろの部屋には背を向けていて、つまり僕の背後にはスペースがある。

そして今、そのスペースから声がした。

一年近く聞いていた、聞き覚えのある優しい声。

思わず振り向く。

「まさか、私のマスターがこんなに愚かだとは思わなかったよ。」

「……………エミヤ。」

そこには、相棒の弓兵が立っていた。

4—5

「…何でここが分かったの？」

「…マーリンから聞き出した。別に内緒にはさせていなかったようだしな。」

「……うん……まあ、うん。」

突然訪れた彼には少し驚いたけれど、何もしないというのも失礼だと思えたので、コップを二つ拝借して、茶を汲んできた。

それから、少し経って、驚きも冷めてきたので話すことにした。

というか、あの魔術師。口止めしていないにしても口が軽すぎるのではないだろうか。

「それはそうだろう。何せあの花の魔術師も、お前の逃亡にはあまり感心していなかったようだしな。」

「そうだったの？」

「ああ。『マスターの頼みだったからね。渋々とは言っても、そんな顔を見せたらあの子は絶対に逃げたりしない。だから、彼のしたいようにさせたんだ。』と、そう言っていたよ。」

「……そっか、マーリンもマーリンなりに考えてはいたんだね。」

「らしいな。だが、奴は夢魔だからいけない。考えるときに自分の快樂を優先してしま
うからな。」

「そりやそうだ。」

僕は少し笑った。

「だけど彼は笑わない。」

「…マスター。君は、此方に出てきてどうするつもりだったんだ？」

「…自分でもわからない。ただ、カルデアに居たら、きつと僕のせいで迷惑を掛ける。い
いや、迷惑だけじゃない。きつと傷つけ、もしかしたら殺してしまうかもしれない。」

「おかしなことを言う。英霊が死ぬわけないだろう。私たちはもう死んでいる。」

「でも、人間は死ぬだろう？」

生身であれ、霊体であれ、この世にいるからには、きつと誰だつて死ぬのだ。

「僕は死ぬのが怖いよ。当たり前だ、僕は死にたくなくて奴と戦ったんだから、ここで死
にたいなんて言ったら、ここまで積み上げた全てが無駄になつてしまうだろう。だか
ら、僕は死ぬのが怖い。死にたくないよ。でも、それ以上に僕の愛した人が傷ついて、死
んでいくのが怖いんだ。」

きつとあそこに居たら、それが重なり合つて、僕はきつと一人になる。

結局は自分のため。

そんな自分の汚さを殺してやりたいほど憎かった。

「……誰も死なないさ。君の周りにいるから死ぬなんて、運命力じゃあるまいに。それに、もし運命力だったとしても、カルデアには関係ないだろう。」

「関係無い訳がない！現に僕は、君の目の前でマシユを傷つけたじゃないか！僕が！この手で！彼女を殴ったんだ！」

そんなこと、許されるはずも無かった。

「……落ち着け、マスター——近所迷惑だろう。」

「あ……ゴメン。気を付ける。」

「まあ、無理もないがね。君は子供だ、そうやって当然だろうからな。」

と、そう言つて茶を飲んだ。

簡単なものが紅茶のティーバッグしかなかったので、湯呑に紅茶という不思議でアンバランスな飲み物になってしまっているが、彼は意に介さずという風にごくごくと飲んでいた。

「……エミヤはここに何しに来たの？」

「ああ……。君にカルデア側から連絡事項があつてね。伝言役を買つて出たというところだよ。それ以外にも私用はあるがね。」

「そう。それで？」

「藤丸立香。君があと二週間経っても戻らなければ、新たに目覚めたマスター適正者である藤丸リツカが、カルデアに残った全サーヴァントとの再契約を結ぶことが決定した。」

一瞬、言葉の意味を飲み込みかねた。

そんなことが出来るのかという疑問と、目覚めたばかりの彼女に僕の責任を負わせてしまう可能性が出来た衝撃とが、同時に体を走る。

「……………そんなことが可能なのか？」

「ああ、キャスター……………失礼、メディア女史の宝具の効果で可能だ。」

「……………そうか。」

「それと、此方は私用だが、マシユ嬢の容体についてだ。意識は戻ったよ。まだ顔に不格好なガーゼを張り付けてはいるが、容体はおおむね健康だそうだ。……………ただ、精神があまり優れん。君が居なくなつたというのを聞かされて、彼女は自分のせいだと思つたらしい。」

「……………」

「それからというもの、彼女は私の食事も食わんし、部屋に引き籠つて泣いていると聞く。この間会つた時には酷い限をしていたから医務室に連れて行つたが、その後聞いた話だと、彼女らしくも無いヒステリーを起こしたそうだ。」

「……………」

「……………これを聞いて、まだ帰る気が無いのだとしたら、私よりよっぽど君のが化け物じみている。」

「……………そうだね。本当に。」

「ああ、本当に。では、私は君に伝言を伝えたぞ。」

「うん、その点については保証しよう。……エミヤは如何？」

「如何とは？」

「僕はカルデアに戻るべきかな。こんな臆病者が居ても、迷惑になるだけなんじゃないか？」

「……………ふむ。」

彼は少し考え込む。

数秒悩んで、すぐに顔を上げた。

「……………これは私の意見じゃなく客観的な事実だ。」

「うん、構わないよ。」

「君が戻って、救われる命が少なくとも二つある、とだけ言っておこう。」

二つ。

僕が戻って、二つが救われる。

それはどうなのだろう。

僕が戻っても二つしか救えないのなら、戻るべきではないか？

いやしかし、もつと多くの命を救えと期待されて、その程度で終わってしまったら、それこそ失望の的になるのでは――

「…では、私はこれで行くとしよう。」

「あ、ちよつと待って。」

「何かね？」

エミヤは後ろを向いていた顔を、首ごとこちらに振り向かせる。

「僕からも二つ。まず一つは伝言だけど…」

「ああ、何かね。」

「『マシユのせいじゃないよ、僕が勝手にやったことだ。君が気負う必要はない。』」

「ああ、了解した。二つ目は？」

そつちについてはただの質問なんだけど。

そう言つて彼を見やる。

優しさで満ち溢れた、守護者の目を見る。

「……君、僕の事は嫌いかな？」

「……………」

僕がそう聞くと、数秒ほどポカンと腑抜けた顔をして、すぐにまた皮肉な顔に戻る。そのまま、

「……………さてね、どうだかな。」

なんて言つて、鼻で笑われた。

「それでは、また会う日を楽しみにしているよ、マスター。」

そう言つて、窓の外、夜の闇に透けるように歩いていく。

後には何も残らない。雪のような残滓だけが、目に焼き付いた。

開演の刻は来たれり、此処に万雷の喝采を

5・開演の刻は来たれり、此処に万雷の喝采を

5—0

男が歩いていった。

赤い外套に黒のブーツを履いて、浅黒い肌とは対照的な白い髪を揺らしながら、とある施設の中を歩いていった。

やがて、一つの部屋に辿り着く。

第三書庫と書かれたその札を一瞥して、彼はその部屋の扉を開ける。

「居るか、花の魔術師。」

「居るよ、こつちだ。」

そう呼びかける声を発すると、すぐに反応が返ってきた。

本棚を三つほど挟んで、件の白い男はそこに居た。

「マスター君はどうだった？」

「酷い有様だったよ。精神の疲弊は特に。…自分が何を考えているのか、そんな判断すら出来なくなっている。多くを殺してしまった上に、自分が愛する人を傷つけたという

責任からここを出て行つたはずなのに、彼女の命が救われると言つても、まだ悩むほどだった。あれじゃあ、もはやバーサーカーとも変わらない。」

「そりゃあそうだろう。衛宮士郎ならともかく、彼はただの子供だからね。歪な魔術師に魅せられたわけでも、赤い悪魔に唆されたわけでもない、ただの善良な少年だ。それに、どちらかと言えばきつと、彼はアヴェンジャーだろう。」

「……酷い言い様だな。」

「申し訳ないけど、オブラートに包むつて役割なら、どこぞの演劇作家にでも任せるよ。」

「……このままだと、色々面倒なんじゃないかな?」

「ああ、面倒と表現して良いものかは知れないがね。」

「でも、このままだとマシユちゃんの精神が崩壊するのも時間の問題だろう。彼女、今の状態じゃ何を言つても壊れそうだし。全く、君レベルの硝子のハートだ。」

「何時だつて一言余計だな、君は。」

「一言余計じゃないと、会話は発展しないだろう?」

「……まあ、いい。この件は君の始めたことだろう、花の魔術師。私も一応付き合ひはするが、最後のシナリオまではできているのだろうか。」

「ああ、出来ているとも。その筋の専門家が絡んでいるんだ。ハッピーエンドの大団円、楽しみにしてくれ給えよ。」

目が覚めるとそこは、布団の中だった。

いや、こうやって言葉にしてしまうとどこでも見ることが出来るような、平和で恵まれた家庭だったように感じるだろうけれど、僕本人の主観から感じ取る感情としては、少しばかりどころか、幽霊を始めて見たときの様に驚いていた。

寝起きでいて夢現、半分寝ているような曖昧な意識が数分経って安定してきて、この場所が衛宮君の家にある一番端の部屋だったことを思い出した。

どうも昨日、一日で多くの事があり過ぎて、現実味を帯びないまま寝てしまったために、脳が現実で起きたことを夢と判断してしまったようだった。

迷惑なものだ。

どれもこれも現実だというのに。

時計を見ると、朝の五時。

まだまだ外は暗い。

もう少し寝てしまおうかとも考えたけれど、久し振りにぐっすり寝てしまつて、二度寝など出来そうも無い。

なので、少し考えなければいけなかった。

『二週間帰つてこなければ、藤丸リツカが生贄となる。』

生贄という響きが悪いかもしれないけれど、あんな苦しみを味わうなんて、生き地獄とそう変わらない。

もう僕のような思いを他人がするのは、出来る限り避けるべきだった。

「……………そんなこと、分かってるんだけどね。」

マシユに顔を合わせる事が出来ない。

彼女を傷つけた張本人が一旦出て行つたと思つたら帰つてきた、そんなことになつたら彼女の気は休まらないだろうし、何より彼女をまた傷つけかねない。

ここ最近は何度も何度も、その考えに至つてはずつと悩んでいる。

自分で自分が情けない。

なんだかこう、スッキリと頭を入れ替えることが出来たら楽なんだろうと、そんな考えばかり浮かぶようになってしまった。

「……………出来るわけが無いよな。僕は、彼女を傷つけた。その事実だけはどうしたつて変わらない。」

自分自身の記憶や記録を変えることが出来たとしても、現実が覚えている。

それはどうしようもない世界の理で、どうしたつて変わらないシステムの一部分だ。

「…彼女を傷つけた。」

そう、それだけはどうしようもない事実で、だから僕は彼女が怖いのだろう。

嫌われるんじゃないか。

その一点に尽きる恐怖心が心を占めている。

もし僕が彼女に怖がられたりなんかしたら、きつと再起不能になる。

その時点で全力で鴨居かドアノブを探し始めるだろう。

「……なんて、事実から目を逸らしている。」

逃がっている。

世界からと、彼女からと、自分から逃げている。

そんな僕を殺したいと思った。

5—2

朝。

日が昇って、光が窓から顔を照らした。

体を起こして伸びをすると、血が体を巡るのが分かった。

「……………おはようございます。」

誰に言うでもないけれど、この言葉を久々口に出す。

少し寒くて、だけれど心地いい空気が部屋を満たしていた。

部屋と廊下を仕切る襖を開ける。

ちようど日が差して顔を照らして、新しい日の始まりを告げた。

実際のところ、僕は朝が好きとかそういう事は一切無いし、どちらかと言えば、夜にゆつたりとした時間を過ごすのが好きなタイプの人間だ。

ただ朝には強いというだけで、朝は嫌いだ。

だから、昔のように二度寝へと洒落込みたくなる前に着替えてしまおうと廊下に背を向けた辺りで、廊下の向こう、外の庭から気配がした。

咄嗟に後ろを向くと、衛宮君が倉へと向かっているところだった。

そう言えば、昨日も朝早くにあそこから出てくるところを見かけた。

何かしら、隠し事でもあるのだろうかとも思っただけで、別にそこまで興味も沸かなかった。

「……………まあいいか。」

そう呟いて、浴衣から着替える。

そう言えば、昨日の夜は浴衣がとても楽だった。

あんなに通気性の良いものはどうなのかとも思っただけで、意外と暖かかったのも驚きだ。

ここに来なければ出来なかった新発見である。

なるほど、これならそんなに風邪も罹らないだろう。

昔から思っていた過去の歴史に対する解決が得られたところで、普段着へと着替え終

わった。

そのまま廊下へ出て、居間へと向かう。

襖を開けて中に入ると、もう衛宮君が起きて、何やら家事をやっていた。

「おはよう、衛宮君。」

「おお、おはよう、藤丸。よく寝れたか?」

「どうだろう。夢を覚えていないから。」

「そうか、そりゃあ結構。」

どうやら今日の朝は目玉焼きらしく、卵を割る音とそれが焦げたような匂いがしてきた。

「ところで藤丸。昨日の夜、誰かと話してたのか?」

「聞いていたの?」

「あー……キッチンで何か弄る音と話し声が聞こえてな。なにかあったのかと心配になった。」

「……別に、なにも無かったよ。知り合いが会いに来ただけで。」

「そうか。……良い人じゃないか、その人。」

そう言つてニコニコと笑っている。

僕からしてみれば、彼の生贄宣告を聞いてからは、何だかひどく酷いことをされたよ

うな気になつていたけれど、でも確かに、僕に伝えずにそれを済ますことだつてできたことを考えれば、優しい人物であるのは確かな様だつた。

「……ねえ、衛宮君。僕はどうしたらいいんだろうね。」

「如何したらつて、それを俺が決めたらだめだろう。藤丸が判断してこそじゃないのか？」

「分かつてるさ。それについては百も承知ではあるんだけど、でも、今の僕だと正しい判断はできない……んじやないかなつて、そう思うんだ。」

「……まあ、そりやそうだよな。そう言う時は誰にだつてある。でも、だからこそ、悩んだ方が良くと思うぞ。第一、俺が答えを出したつて納得できるとは思えないし。」

「……………」

それでは遅いのではないか。

許されている時間はあと二週間を切っている。

だから、その間に何をすべきか考えなければならぬ。

逃げてきた身で言うのも馬鹿馬鹿しいけれど、彼女は何としてでも、僕と同じ道を歩ませてはならないのだ。

彼女がマスター認定されかけている以上、新たに特異点が出る可能性でも出てきたの
だろう。

ならば、僕は戻るべきではないだろうか。

だが、僕が戻れば、マシユやほかの皆を傷つけかねない。

だからこちらに逃げてきたのに、また戻っては泡沫に帰してしまふ。

リツカちゃんを取るか、マシユを取るか。

ほぼほぼ究極の選択と言えた。

「……衛宮君。」

「なんだ？」

「僕はどうしたらいいんだろう。」

「……お前の好きにしたら良い。悩むのだからって人生だろうか？」

「……やけに格好いいこと言うじゃないか。」

「いや、俺の義理の親父の受け売りだけだな。一生悩んで生きてきた人がそう言っているんだ。説得力って言うか、そういう感じの、一言では言えないものがあるだろ？」

「……うん、そうだねえ。でも、その返答で悩みがさらに増えた気がする。」

「人間五十年としても、藤丸はまだあと三十年以上あるんだ。ゆっくり考えても、良いと思っけどな。」

「……ツ、そうだね……うん、考えることにする。」

さすがに叫ぶことは無かったけれど、左手に被せた右手の爪が、左手の甲を切つてし

まう。

「……ごめん、ちよつと外に歩いてくる。しばらくしたら戻るから。」

「え？……あー、分かった。」

一瞬『やつちまった』みたいな顔をした衛宮君だったが、すぐにいつも通りの爽やかな顔に戻った。

朝御飯が出来る直前にこんな行動をして悪いとは思ったが、少し一人で考えたかった。

靴を履いて、玄関から外に出る。

そのまま二十分ほど、住宅街を縦横無尽にぶらぶらと、行く当てもなく適当に道を歩いて、大きな赤い橋が見えてきた。

河川敷に降りて、ベンチに座る。

季節の関係もあつてか、この時間帯はあまり人が居ない。

少し肌寒いけれど、我慢できないほどではない。もともと寒さには強いのだ。

だけれど、その隠れ特性を存分に發揮できる寒さ系の特異点がかなり少なかったとは思ふ。

閑話休題。

一旦気持ちの整理をしよう。

「……………僕は戻るべきか否か。」

こつち側に出てきた理由は『マシユを筆頭とした全員を傷つけないため』だ。

そして戻る必要が出てきた理由が『僕が逃げたから』であつて、つまりはここで僕の言動理由に矛盾が生じている。

「だから、どちらかを切り捨てる。」

切り詰めて行けば、最終的にはそうなるのではないか？

リツカちゃんを生贄にするか、とてつもなく高いリスクを負つてカルデアに戻るか。いや、そもそもカルデアに戻るのか？

エミヤがあんなことを言いに来てくれたつてことは戻つてもいいと思われているかもしれないけれど、でももし、そんなことは全くないとしたら。

「僕はどうすればいいんだ……………」

何をしたらいいんだ。

そう、思わず声に出す。

だがその言葉も空虚に響く。

誰も居ない公園で、静かに反響するだけだった。

少女は一人蹲る。

誰もいない部屋の誰も居ないベッドの上で、生気を失った目をしながら、たった一人でただ一人の敬愛する人の帰りを待っていた。

どれくらいそうしていたか、少女自身も良く分かっていない。

顔を膝にうずめて、小さく嗚咽を漏らすのみだった。

と、そうして暫く経った辺りで、部屋の扉が音も無く横に開いて、廊下から光が差しこむ。

顔を上げると、そこには白いローブの優男が立っていた。

「やあ、マシユ嬢。大丈夫かい？」

「……マーリン……さん？」

「ああ、花の魔術師マーリンお兄さんさ。……それで、かなり酷い有様だけれど、ちゃんとご飯とか食べてる？」

「うるさい……先輩を外に連れ出したのは、貴方でしょう。それなのに大丈夫か？そんな訳ないじゃないですか！」

「……………」

「……なぜ、何故なんですか？私の最も大切な方を、なぜあなたは奪うんですか？嫌がらせですか？世界の意思とでも言うつもりですか？」

「違うね。彼の意思だ。」

「嘘を吐くな！あの人がかんなことを望むはずがない！……だって、彼は……英雄なんですよ？」

「……………マシユ・キリエライト。君は、たった一つの大きな勘違いをしている。」

「……………それは、」

「『何なんですか？』だろう？わかるとも！そのうえで質問だ。君は、その間違いを知りたいかい？」

「私は……………」

「どうなんだい？知りたいかい？知りたいというなら吝かでは無いけれど、君の後悔の責任までは取れない。だからよく考えたまえ。」

少女は思考する。

間違い、それについて自分で思い当てる事が出来れば、彼の答えを聞かなくとも良い。

現在の彼女が心底苦手な彼の力を借りなくて済むのなら、それは僥倖と言えた。

だが、そんな彼女の考えを余所に、優男は続ける。

「……………」

「おや、もしかや自分で間違いを見つけようとしているのかい？それでは駄目だよ、前提が

間違っている。」

「……どういうことですか？」

「君の間違いはその固定観念だ。正解だと思い込んで、それを信じて疑わない。光東を超える物質は無いと、たった一つの理論だけで鵜呑みにしているようなものさ。だから、君のやろうとしていることは『イラストの種類が一枚だけの間違い探し』だ。答案も、正解側の絵画も無い。そんな状態では「貴方は！」……」

「……何が言いたいんですか、花の魔術師。」

「………はあ、全く君は、弱いなあ。それでも彼のサーヴァントかい？」

「………。」

「そんな君の弱さの中でも、彼を英雄だと思つているところが一番弱い。」

「………は？」

「……おいおい、そんな信じられないでも言うような顔をしないでくれよ。君の崇拜対象を粉々にぶち壊したくらいで。純真無垢な可愛らしい顔が台無しだよ？」

「………彼は、英雄です。文字通り世界を救つたのですから、それこそ英霊に選ばれてもおかしくない位の事は成し遂げている。それならば、彼も等しく英霊であるはずではありませんか。」

「………理由を二つ教えよう。長くなるから眠らないようにね。まず一つ、彼の死生観だ。」

彼は、自分が犠牲になる事で、ほかの全てを救えると思ひ込んでゐる。現に、彼の周り
にいる人々は生きてゐるのだから、それについては実行してゐる。だが、彼には関係の
ない人間が数えきれないくらいに死んだ。そして、彼のスタンスは『自分の犠牲で誰か
が助かる』だ。わかるかい？彼はね、自分の犠牲で自分以外の全員を救おうと考えてい
る。というか考えていた。彼のそれは愚者そのものだ。そんなレベルの傲慢、『七つの
獣』に選ばれていてもおかしくないレベルのものなんだよ。そんな彼が英雄たり得るも
のではなからうというのが一つ目。

そして二つ目だけれど、これは彼自身の自己評価として、彼は自身を一般人だと思ひ
込んでいる。彼自身は、英雄などという大仰な物で無く、ただの一般人でありたい
と願つてゐる。……まあ二つ目については語りだすと止まらないからこのくらいで
良いだろう。

と、以上二つによって、彼は英雄で無く、一般人とも成り得ないという不安定な立ち
位置で落ち着いてしまったから、英雄ではない。わかつたかな？」

「……それについては分かりました。ですが、どうしたら良いかは分からなくなりま
した。」

「なんだ、そんなことか。簡単じゃないか。」

そう言つて、優男は微笑んだ。

「彼の所に行くというのはどうだろう。幸い、赤い外套のアーチャー君がマスターの居場所を突き止めてくれた。全く、彼の千里眼は目を見張るものがあるけれど……それはまあ置いておいて。」

「……マーリンさん。貴方は一体何がしたいんですか？」

「私？私ほただ、仲睦まじい君たちをもう一回見たいだけだよ。」

「……………」

「さあ、彼を連れ戻したまえ。君の手で、君好みの英雄を作ると良い。」

5—4

長い間外に居て、体が冷えてしまった。

あれから二時間三時間と時間は早く流れ、さながら博打で負けた貧夫の酒盛りの様に缶珈琲を飲んだのだが、思いのほか効果が薄く、あまり体が温まらなかつた。

温まったとしてもせいぜい指先くらい。心はまだ冷え切つたままだった。

その三時間の間に考えたのは、悪魔の選択とも言うべき二択だったけれど、僕はその選ぶことが出来ず、またノコノコと衛宮邸に足を運んでいるところだった。

相変わらず、僕はどうしようもないダメ人間だったと痛感しただけの四時間となつた。

なつてしまった。

長考というものは僕は割と苦手で、時間が経つごとに集中力が落ちてくるという事実の立証が出来たと無理やり納得させて、泣く心を抑え、住宅街を歩く。

衛宮邸まで何とか行き着いて、門を潜つて中に入る。

「考えていただけなのに」

なんだかとても疲れた。

体中が怠さで満ちている。

これが力ならどんなに良かったか。

家の中に入って居間に向かうが、衛宮君は見当たらない。

一度人に話して、ストレス過多な心を落ち着かせようと思つたけれど、居ないのなら

仕方がない。少し腹も減つたし、何か食べようとキッチンに入った。冷蔵庫を開ける。

「あ……」

食材は無かった。

どうやら、衛宮君は食材を買いに行つたらしい。

商店街辺りに居るだろうか。

だとしてらすれ違いになつてしまった。

「………まあいいか。待つていれば帰つてくるだろう。」

そんな希望的観測のような確信をもつて机に頭を擡げる。

今日は良い日だ。

気温が比較的高く、日も差している。

唯一、カレンダーの運勢が友引なのが不安要素だけれど、それも関係なくなるくらいには気候要素が安定している。

こんな日はこれから生きていても稀なのだろうか、とそんなことを考えている時だった。

ピンポンと、チャイムが鳴る。

衛宮君が居れば僕が出なくてもいいのだろうが、今はそういう訳にもいかない。

最初に会った時の桜ちゃんもこんな気持ちだったのだろうか。

「はい。今出ます。」

玄関の横開きの扉の鍵を外して、手を掛けて。

ぐいと横にスライドさせる。

そこには、出来れば誰も居てほしくなかった。

考えうる限りで最悪の事態が起きたからだ。

「……………マシユ？」

「……………はい、お久しぶりです。マスター。」

「なあ、花の魔術師。結局今回の目的はなんだ？」

「何の話だい？」

「とぼけるなよ。マスターに関してのあれだ。」

「ああ、あれね……別に、マスターに戻ってきてほしいだけだよ。」

「それだけか？本当に？」

「ああ、それだけだとも。ただ、彼が戻ってくる確率が跳ね上がる条件の一つにマシユ嬢の存在があつたからね。それを利用させてもらった。」

「……貴様は本当に……いや、何でも無い。だが、グランドオーダーは終結した。なぜ今更呼び戻す？」

「はあ……星の守護者よ。君こそ、何も分かっていないのかい？」

「何が「例の。」……」

「七十二柱の魔人のうち、数体が行方不明となっているらしい。」

「なっ!! 貴様、どこでそれを……。」

「そこはそれ。アヴァロンネットワークと言う奴だ。安心してくれ、相手は真つ当な人類だから。」

「そうか……。それで？彼の魔人柱たちが行方不明という事は、特異点が生まれると？」

「まあ、その可能性が高いだろうね。やれやれ、全く。あそこでシャーロック君が何を

知ったのかはともかくとして、先が思いやられるよ。」

「別に彼が何を知ったって、こちらについては関係ないだろう。」

「……君も君だね。どうしてそれもフラグを張るようなことをペラペラと並べ奉るのか。」

「さてね。きつとそう言う性分なんだろうさ。……だが、それにしたってここまでやることも無かつただろうに。本当に目的はあれだけなのか？」

「ああ。もう一つあるけれど、そちらもサブのようだしね。」

「サブ？」

「そうだ。だけど、答えを教えるのは少し癪だし、ヒントでもあげようかな。」

「……………」

「キイワードは『共依存』だ。」

救いの雨

6・救いの雨

6—0

「マシユ…?」

「お久しぶりです、先輩。」

彼女は御辞儀の見本のようにしっかりと下げていた頭を上げて、にっこりと笑う。

その笑みにどんな意味が含まれているかは分からないが、以前のように屈託無くとはいかなかったらしい。疲れが表面に出てきていた。

「お迎えに来ちゃいました。」

「お迎えって……」

「はい、お迎えです。本当はリツカさんも居たんですけど、商店街の辺りで別れてしまつて、通信でも気にするなど言われたので、私だけでも、と。」

「…それはダメだよ、マシユ。」

君だけは来ちゃいけない。ほかの誰かなら——いや、ほかに誰が来たとしてもあまり気は進まないけれど、でも、ほかの誰かなら許せたかもしれないのに——君だ

けは来ちやいけなかった。

「僕は君を傷つけたくなくて、あの場所から逃げ出したんだ。それなのに……君がここに来たら、すべての行動に意味が無くなってしまふ。それはいけない。」

「……先輩、それでも、私は……」

彼女は手をこちらに伸ばす。

雪のように白い肌をした、綺麗な手。

「貴方を……私だけのマスターに……」

その手があと少しで僕の腕に触れる。

「ッ……!!」

そう自覚したときには、僕はもう反射的に走り出していた。

後のことは全く考えていない愚かな行動だったけれど、何とかしてこの場から離れたかった。

6—1

走って走って、足が棒になった辺りで、教会に着いた。

かなり痛む足を引き摺って、四日前に見つけた例の地下室に入る。

ドアを背にして、へたり込んだ。

何でここに来たんだろう。

そんなに思い入れがある訳でも、頼れる人が居るわけでもないのに。「……それはきつと、マシユたちが知らないからだ。」

この場所はマシユたちの意識の外にある。

知っているのは衛宮君くらいか、もしかしたら桜ちゃんもそうか。だからここに居れば安心だと、そう無意識で考えたかもしれない。

「……………弱いなあ。」

本当に弱い。

彼女は迎えに来てくれたと言った。

「それなのに。」

逃げ出して、この様か？

あまりにも弱い。脆弱で矮小だ。

「……………」

怖い。

心を恐怖が支配する。

心に殺意が芽生える。

……………

殺意？

「なんで？」

心に問うが、答えが返るはずも無い。

だが、殺意と共に湧き出る感情で、誰に向けての殺意かは大体が想像できた。

自分の感情なのに想像というのもおかしい話だけれど、ともかく想像は出来た。

「……………嫌だ」

嫌だ

殺したくない

もう誰も殺したくないのに

殺意ばかりが湧いてくる

井戸水のように湧いて

溢れて

感情が

死んで

感覚も

温度も

音も光も無くなって

僕の全てが無くなって

「……だれか、助けて」

虚空に響く、僕の声

6—2

「おやおや、彼は案外、心が脆いらしい。」

白ローブを深くかぶる魔術師は、億劫そうに呟いた。

なんとも、つまらなそうに、呆れた顔で虚空を見る。

暫くして、後ろに控える扉が音も無く開いた。

一人、壮年の劇作家が歩いて入る。

「『その岩を砕くが良い、出来たのならば国をやろう！』」

「……また君は。騒々しいねえ、シエイ氏。もう少し静かには出来ないのかい？」

「なんだか以前に似たようなことを言われた気がしますが、ともあれごきげんよう、M

r. フラワー。何が御用ですか？」

「いやね、マスター君。心折れちゃった。」

「おお、なんと！……いやはや、やり過ぎましたかな？」

「いや、大丈夫さ。彼の心を救うには十分すぎる、最高の駒が一つある。彼女がそろそろ

あそこに着くはずだ。」

「ああ……少女も向こうへ行つたのですか。ここのシナリオは負けましたなあ。」

「そうだね、アンデルセン氏は素晴らしい脚本を書く。こと悲劇に関していうなら、彼は天才だ。」

「まあ……うん、そうでしょうな。吾輩が担当したのはあくまで『逆転』。そこまでの道のりは彼にすべて放り投げましたからな。」

「それはそれは、随分とハードなことを頼んだものだね……彼、泣いていなかったかい？」

「なに、今は寝ております。倒れこむ寸前にナーサリー氏が通りかかったものですから、あとのことは任せました。それに、彼に無茶ぶりで返されましたから、御相子ですよ。」

「ハハハ、やはり仲がいいんだね。彼らは。」

「その様ですな……最も、彼女からの一方的な興味なようですがね。アンデルセン氏はもう興味を無くされている。」

「なんだ、そうだったの。彼がああ魔本に興味を持ったんだったら、それはそれで面白そうなの。」

「それは、まさに喜劇としか言いようがない！」

「そう笑ってやるなよ。」

「笑いたくもありません。」

「まあ、それもそうか。」

「……ところで、前々から疑問に思っていたのですけれど、彼を逃がすことなんて本当に可能だったのですか？」

「どういう事？」

「いえ、ですから。この去る者を仕留めると言っても過言ではない魔術師界限、その中でも特に重要であるとされるこの天文台から、本当に貴方だけで彼を逃がすことは出来たのか、と聞いているのですよ、フラワー。」

「ふむ……ここで答え合わせでもするかい？」

「……」

「君だけで、この価値ある情報を聞くかい？」

「……いえ、止めておきましょう。シナリオとは、演じてこそ意味がある。犯人の分かった推理小説など、ただの紙も同然でしょう。」

「フフフ、良い判断だ。」

「それに私は……」

「私は？」

「私には探偵の演技は向いていないのですよ。」

「……うん、私もそんな気がするよ。」

「ええ、人生とは影法師、人情とは赤い夕陽……ならば人は、そこいらの猫と変わらない。」

違いますかな？」

「……………私、哲学は苦手だよ。」

「呪文も読めないあなたのことです、さぞ難しいでしょうなあ！」

「おやおや、言ってくれるじゃないか、シエイ氏。夢に化けて出てやろうか。」

「そりゃあ、勘弁ですな。」

「私も御免被る……………お、場が動いた。」

「はい？」

「リツカさんが着いた。」

6—3

「……………」

どれほど経っただろう。

もう三時間ほどこうしている気がするし、かと思えば次の瞬間には、まだ三分くらいしかたっていないような気もする。

「……………」

少し背中が痛くなる。

思ったよりも固い床が影響しているらしい。

一度立って、肩を回して背筋を伸ばす。

体中に血が巡る、気持ちのいい感覚がした。

扉には鍵が掛かっている。幸い、鍵は頑丈で、壊れるようなことはなさそうだ。

部屋の中を見回して、以前では出来なかったような、しっかりとした探索を始める。

こんなことをしている場合ではないと分かっているけれど、今は体を動かしていないと、気が狂いそうだった。

とりあえず近くにあった棚を漁る。

かなり昔のものだったが、まだかろうじて記憶にある、懐かしい車の玩具が出てきた。

「わあ、懐かしいなあ。」

思わず声が出たが、気にしない。

かなり薄れた記憶を辿って、後ろ側に付いている紐を引っ張って床に置くと、少しガタとした後に走り出した。

驚いた。酷い保存状況だったけれど、まだ動くのか。

からからと乾いた音を響かせて回るプラスチックのタイヤは、部屋の端から端まで走った後に止まる。

立ち上がって拾いに行くと、玩具の止まった壁に接する棚の下から、何か細長いものが覗いている。

気になって、引き出した。

「ツ！」

それはロープだった。

ちようど僕が首を通せそうなくらいの、細長いロープ。

一瞬の動揺。

それと同時に、さっきの殺意が沸き上がる。

「……これがあれば」

これがあれば、殺せる。この棚の中には金槌も釘もある。これだけ足りなかったけれど、此れさえあれば、彼女を救える。

早く殺さないと

「早く殺さないと……」

それだけがロープする。

「……早くしないと」

ギリギリ天井には手が着くくらい椅子が、この棚の横にある。

とりあえず、とその椅子に乗って、棚の中段から無造作に釘を掴む。

何本か掌に刺さったが、あまり気にはならなかった。

何本か、真っ直ぐなものを見繕って、それ以外を棚の金槌と持ち替えた。

ロープを押さえて天井に釘を打つ。

金槌がやけに重く感じた。

十分後。

小さな殺人器は完成した。

少し首を通す穴が小さいかもしれないけれど、それは縄自体が短かったのだから、仕方がないと割り切ろう。

……これで準備は整った。

後は覚悟だけ。

殺す覚悟

死ぬ覚悟。

生き抜く覚悟をしなければ。

6—4

「君は、それでも私の恩人なの？ 藤丸君。」

突然、最後の最後に覚悟を決めるための時間を過ごしていた僕の背後から、少女の声
がした。

「君は……」

「そ、藤丸リツカ。君と同じ、カルデアのマスター。」

藤丸リツカが立っていた。

なぜ彼女がここに居るのだろう。

部屋には鍵が掛かっていた。錠前やら門やらでなく、よくあるタイプの鍵が閉まっていたはずだ。

いや、それ以前に彼女はまだカルデアからここへは来れないはずではないのか？
それになんで、ここが分かった？

「……んー」

やれやれとでも言いたげに、彼女は顔を上げた。

「ここへは、普通に許可取って飛行機で来たんだ。

なんで分かったかとかこの鍵については土郎サンに頼んだんだよ。彼、凄いな。魔術でパパッとカギを作っちゃった。今はちよつと外してもらってるんだけど、あとで君もお礼を言うんだよ？」

そんな風にニコニコと、今日あった出来事を面白可笑しく語る夕飯時のような雰囲気
で、彼女は言った。

「……何で来たの。」

「決まっているじゃない。君を連れ戻すため……いや、違うなあ。なんて言えばいいんだらう……うーん……」

「いや、決めてから来なよ。」

「いやいや、実際に会うと何を話していいか分かんないよねー。……そうだなあ、君と話すため、かな。」

「話す?」

こんな人間もどきの出来損ないと?

「うん、話す。だって君、私のカウンセラーなんでしょ? だったらしつかり私の想いとか聞いてもらわないと。」

「ああ……そう言えば有ったね、そんな話。」

だが、こんな僕にはもう務まらないのでは?

「うーん……まあ、別にそれを気にしなくてもいいよ。私と話そう。」

そう言つて、にっこりと笑う。

先程から全く以て屈託のない綺麗な笑みだった。

「私と話したうえでまだ君が死にたいって言うんだったらそれでも良いよ。でも最期にさ、一回だけチャンスを受頂戴?」

「……………」

……………

「……うん、いいよ。でも最後に君の目の前で、首を吊つて死んでやる。」

「ありがとう、藤丸君。」

「別に……いいよ。これで最期なんだから。」

6—5

「んー……じゃあ、前々から気になってたんだけどさ。」

「なに？」

「藤丸君とキリエライトちゃんって付き合っているの？」

「………何でそうなるんだ。………付き合っちゃいないよ。ただ仲が良いだけ、特別な好意は何もない。」

「特別な行為も無いと。」

「やかましいわ。……女子相手に話してる僕の身にもなってくれよ。」

「わかるかったって。そう言えば、さつきキリエライトちゃん、酷く荒れていたんだよ。電話越しに号泣しちゃって。」

君、何をしたのさ。」

「何もしてないよ。僕はただここまで走っただけだ、彼女には何もしてない。」

「ふうん………なるほど、それが原因か。」

「なんか言った？」

「ううん、何にも。それじゃ次……この前さ、あの施設でレオナルド先生から聞いたんだけど、最終的に君一人で人理を修復したらしいね。」

「……まあ、うん。最前線で戦った、今も生きている人間って言うのは、僕一人だ。」
「人間？」

「…君も見たでしょう？ エミヤとか、マーリンとか。」

「ああ、そういう事。」

「うん、彼らは英霊だからね。僕みたいな後輩とは違う。」

「そう言うもんなんだね…大変だあ。」

「何を暢気に言ってるんだ。僕が死んだあとは君が後釜に入るんだよ？」

「タハハ、大変だねえ。」

「……僕からも一つ聞きたかったんだけどさ。」

「なにかな？」

「…君と衛宮君って、親戚だったりする？」

「ううん、全然そんなことないよ。士郎サンも私と似てるなあって思ったみたいだったけど。」

「ふうん…。」

「あー、でも兄貴が居たっていう話は聞いたな」

「ん？」

「いやね、今の私の藤丸姓って、母方の親戚のものなんだけどさ。昔、私が生まれた町で

大火災があつたらしくて、それで母さんも父さんも死んじやつたから、その家に引き取られたんだ。」

「……………」

「で、その時に私の兄貴も行方不明になつたらしいんだけど…良く分かんないなあつていう話。

もう十年くらい前のことだし、その町の名前も忘れちやつたしね。調べれば分かるかもだけど、もう私は昔の私とはきつと違うから。」

「…………なるほど、良く分かつた。」

「なにが？」

「君は強いって分かつた。僕なんかと比べ物にならないくらい、硬くて強い。」

「でもその代わり、割れたら中々戻らないよ。……今の君みたいに。」

「言うね。」

「今までキリエライトちゃんがした心配の分の仕返しだよ。彼女はきつと許しちやうだろ。うから、私が代わりにやつておく。」

「そりゃあ良い。」

「でしょ？……それじゃあ、最後の質問。」

「ああ、良いとも。」

「君は何を後悔しているの？」

「僕は……」

6—6

「僕は……」

答えに詰まる。

この言葉を返して良いものか。

彼女は落胆し、失望しないだろうか。

「僕は……」

だが、話さなければいけないだろう。

彼女はそのために、きつとここに来たのだ。

なら、話すべきではないか。

「…僕は、たくさんの人を殺した。」

「……。」

「人理修復で救った人類の数に比べれば微々たるものだけれど、それでもたくさんの人が僕の目の前で死んでいった。

憎しみの目を向け、悲しそうな顔をして、呪詛を吐きながら死んでいった。

だから、僕は許されちゃいけないんだよ。

許されて、そのことを忘れて、ただのうのと生きるなんて、僕にはできない。」
「でも許されたい、と。」

「……………僕はそれを願っっちゃダメなんだよ。きつとそれをやったら、人間でいる資格は無い。」

「……………はあ…。」

僕の答えを聞いて、リツカちゃんは呆れ顔でため息を吐いた。

「…君は、心底馬鹿だね。」

「なんでさ。そんなに言うことないじゃないか。」

「いや、言わせてもらうよ。ここは絶対に譲らない。君は心底馬鹿だよ。全人類をまとめたような大馬鹿者だ。」

「……………」

少しムツとする。

そこまで言うことも無いじゃないか。

「……………なんでそう思うのさ。」

「あれ、ちよつとムツとしてる?」

「そりゃあするさ。そんなに言われたら。」

「ああ、ゴメンね。悪かった悪かった。」

絶対思つてないだろ。

棒読みすぎて逆に清々しい。

「話を戻すけれど、君は本当に馬鹿だ。」

「お、おう……。」

「君は人を殺していないじゃない。なのに、なんで君が気に病む必要があるのさ。」

「…確かに、僕は彼らを殺していない。でもね、僕が助けることが出来たはずなんだよ。死んだ人たちは、僕がもつと早くその場に着いていけば助かった人たちなんだよ。」

「だから、そこが馬鹿だと言っている。全部が全部を救おうとするなんて、そんなのただの夢物語だ。しかも他人の殺意を自分のものにして、それが仲間を傷つけるから自殺？ふざけんなつて話だよ。」

「……でも、実際に傷つけたじゃないか。」

「うん、そうだ。君はキリエライトを傷つけた。でも、それはキリエライトの方が悪い。」

「………なんで？」

「君一人にそれを背負わせておいて、それで私たちが傷つけるなつていうのはおかしい話だよ。」

「今回のこれは、君の気持ちを理解できなかった彼女が悪い。」

「……………」

「ここまで言っても、まだ死にたいの？」

「…それでも僕が彼女を傷付けて、人が死んだのは事実だ。だから、許されちゃいけない。

罪を償わないと……」

部屋に静寂が満ちる。

顔を上げると、こちらを睨む彼女の姿があつた。

怒っているらしく、声のトーンが落ちている。

「罪って何さ」

「……いや、君は人を救ったんだ。

この町に居る人も、カルデアの人達も、君自身も。」

「…僕にそんな自覚も達成感も無いよ。」

「……なんでそう考えるの？ 見つめるべき事実でしょう。」

一瞬、息が詰まる。

ずつと避けるべき問いを突き付けられたような感覚だった。

「……僕は怖いんだよ。」

今回の事件で、僕は仲間を一方的に傷つけた。けれど、誰も僕を責めないんだ。

おかしいだろう？

僕は人を傷つけた。なのに、それについて僕のことを誰か責めた？僕の事を叱ったか？

誰もそんなことはしていない。あそこから逃げたことを責めることはあれ、傷つけたことについて追及されたことは全くなかった。

それが怖いんだよ。

『もし僕が人を殺してもこうなるんじゃないか。』

『周りを傷つけても、世界を救った人だからってだけの理由で誰も僕を罰さないんじゃないか。』

そんなことは無いと分かっているけど、そんなもしもが頭に浮かぶんだ。

僕は死にたくない。人を傷つけたくないから傷つけるなんてことはもちろんしないし、殺すなんて持つてのほかだ。

だけど、今回の事件があった。

我を失って、マシユを傷つけて……それで僕はこんな風にのうのうと生きている。

そんな現実が怖いんだ。

だからこんな風な僕には、存在価値も、存在証明も、存在理由も何一つとして、残っていないんだよ。」

喉が痛い。

普段話す時よりも、無意識に声が大きくなってしまっていた。

何故だか口調も荒い気がする。

ふと、彼女とあつてから今まで、まるで怒っているように彼女と話していたことを自覚した。

僕が少し黙ると、彼女は口を開く。

「大丈夫だよ。」

「何が？」

「大丈夫。君には存在価値も、理由も証明も、何一つだつて欠けていない。」

「何を根拠に……」

「この私が」

静かで穏やかだが力のある強い声で、彼女は宣言をするように声高に言った。

「この私が、私自身の生を以て、君の存在を証明しよう。君の価値を肯定しよう。生きる理由を君に上げよう。だからどうか、お願いだから、君に生きてほしいんだ。」

強い圧を放つ声でそう言った。

「……君は、何のためにそんな……」

「ほかでもない君のためだよ。君は、私の命の恩人だから。死なれたらとてもじゃないけど、私は生きていけないから。」

そう言つて苦笑いを浮かべる。

「…でも、もしそうだとしても、僕はあそこに戻れない。

彼女を傷つけて、戻れるはずも無い。」

「なら、しっかりと謝ろう。謝つて、許してもらつて、それで良いんだよ。」

「だけれど…」

「けれどじゃない。人間つて言うのは、許される権利のある数少ない生き物なんだから、しっかりと許されていいんだ。君が忘れなければ、大切な人の死も、無かつたことにはならないからね。」

「……………」

「…何をポカンとしているの？大丈夫だよ、君がまた人を無差別に傷つけて死にたくなつたら…その時は、私が君を殺してあげる。」

「……………」

本当に強い。

心からそう思う

「…………観念した。」

「ん？」

「生きることにするよ。マシユに全力で謝つて、許してもらわなきゃいけないから。」

泣きながら、僕はそう言った。

残念ながらしばらくは枯れることはなさそうで、枯れるまで、何とか笑っていることが出来た。

なんだか、天使の羽で頬を叩かれて目が覚めたような、そんな心地だった。彼女に会えて良かったと、そう思えた。

収束

7・大団円

0

「すみませんでした。」

そう言つて、僕はマシユに頭を下げた。

1

あれから、すぐに教会を出た。

マシユに許してもらえらるうかという不安が胸の内にあるのを自覚すると、今にも逃げ出したくなつたけれど、啖呵を切つて出てきた手前逃げるわけにもいかず、重い気持ちで衛宮邸に向かった。

衛宮邸に着いてマシユを探すと、衛宮君が帰つて来ていて、マシユに茶を出しながらこの数日間の僕の動向を話していた。

その時には、先程玄関で見たような目の濁りや疲れた様子は無く、いつも通りの彼女の雰囲気ですべての話を聞いていた。

まだ家に入る勇気が出せずに窓の外から居間を眺めながら四苦八苦していると、途中

で僕に気付いたのか、今の彼女の全速力であろう走り、僕のもとに駆け寄ってきた。それだけで、少し肩を揺らしていた彼女が息を整えたのを確認して、僕が90度に腰を曲げたのが冒頭の事だった。

因みにリツカちゃんは、僕が四苦八苦して悩んでいる様子をずっとそばでニヤニヤしながら見ていた。

帰ったら一回説教でもしてやろうか。

「……………先輩は大丈夫なのですか？」

そんな声がかげられる。

ひとまずは、と顔を上げて体を起こして見合うと、なんだか普段より硬い顔をしたマシユの顔が目に入った。

「大丈夫って？」

「ですから、色々と。」

「いや、僕は大丈夫だけど…。」

「そうでしたか…よかったです…。」

そう言つて、安心したかのような、ほうつとした溜息を漏らす。

どうやら心配してくれていたらしかった。

「…そういうマシユは？僕が暴れたときに、その…顔を怪我したって聞いて…。」

「ああ……あれならもう大丈夫です。外見上も内面上も完治しました。」

「そっか……」とこゝろで先輩！」

僕が安心してかけた矢先、日常生活ではおよそ聞かなかった声の張りで、マシユは僕の言葉を遮った。

「貴方は何処に行つていたのですか！カルデアでは皆さん心配して、大変だったんですよ！衛宮さんがこの家に居候させてくださったから良かったものの、あのまま外の公園で凍死していたらどうするつもりだったのですか！」

「……いや、それについては本当にごめん。とりあえず、あの時取れる最善の行動のつもりだったんだけど……。」

「最悪も最悪ですよ！皆と話し合うべきだったんです！あの直後は対人恐怖症とか、そういう理由で無理だったかもしれませんが、それでももつと待つてから皆と話して、解決すべきだったんです！」

「……ゴメン、悪かった。」

「本当ですよ、帰ったらマーリンさんと先輩と一緒にお説教です。正座の準備をしてくださいいね。」

「ああ、うん。分かつてる。」

僕は頷く。

マシユの様子が気が気でなかったけれど、何とかなつたようで安心した。「……そつちは終わったか？」

安心したタイミングで、衛宮君が家の影から顔を出す。

「あ、士郎サン。やつほー、さつきぶり。」

「ああ、リツカちゃん。藤丸を連れてきてくれたみたいで、大分助かったよ。」

「そつちもキリエライトちゃんの保護、ありがとうございます。」

「いや、藤丸の関係者つてことは、只者じゃないだろうからな。急いで帰った。」

「今の彼女は只者だけだね。にしても士郎サン、よく藤丸君の隠れてる場所分かったねえ。」

「ああ、あれは——」

と、向こうは向こうで会話が弾みだした。

チラリとマシユを見ると、何だか呆けたような顔をしていた。

「マシユ、どうかした？」

「あつ、いえ。……ただ、リツカさんのコミュニケーション能力は目を見張るものがあると、文字通り目を見張っていたところですよ。」

「ああ……」

確かに、数時間前に初めて会ったとは思えないような仲の良さだ。

ちよつと不気味なくらいだが。

そう言えば僕の時も、彼女と話しているとどこか安心するというか、隠したいことまで打ち明けてしまえるような距離感だったように思う。

奇妙なほどに、安心感がある人間だ。

「……………起源…」

「先輩？何か仰いましたか？」

「えっ？僕、なんか言った？」

考え事をしていたからか、何を言ったか分からなかった。するとマシユは難しい顔をして口を開ける。

「無意識の発言でしょうか…確か、起源と仰っていました。」

「起源……………起源か。」

「……………先輩？」

「いや、何でもない。」

起源。

魔術世界で本人の特性を表すと言われるそれは、本人の表面上にも見てわかるくらいには、起源保持者自身に影響を及ぼす。

と、確かマーリンから聞いていた。

彼女の少し変わった雰囲気はそれによるものだろうか。

此方の緊張を解き解し、一気に距離を詰めてくるような異様な距離感……。

「まあいいか。……さて、マシユ。これからどうしようか。」

「これから、ですか。そうですね……まずは、カルデアに帰りましょう。話はそれからです。」

そう言って、にこりと笑う。

とても儂い、蠟燭の火の様な笑みだった。

2

「本当にもう帰るのか？もう少しゆっくりしていけばいいのに。」

翌日の昼過ぎ、衛宮家の玄関で、衛宮君がそうぼやいた。

昨日。

さすがに日帰り用のチケットは持っていなかったらしく、衛宮君の家で最後の一晚、お世話になった。

衛宮君が呼び寄せたらしく、桜ちゃんや藤村さんと一緒に夜飯を食べて、適当な世間話や面白い体験談など、それなりに楽しく夜を過ごした。

何よりマシユとリツカちゃんが楽しそうだったのが、僕からすれば一番嬉しい出来事だった。

簡単明瞭な回想終了。

「いや、これ以上は申し訳ないよ。それに、これから帰って使い魔と一緒にマシユに怒られなきやいけない。」

「…そうか。落ち着いたらまた来いよ。全力の手料理で歓迎してやる。」

「そうだね、また来るよ。楽しみにしておく。」

なんて、それなりに未来を楽しむような会話をして、門まで歩く。

敷地の外に出て振り返ると、衛宮君が手を振った。

「……じゃあな、三人とも。今度来るときはもつと面白い話を持ってきてくれ。料理の肴にちようど良い。」

「ああ、じゃあね。衛宮君。」

「それじゃ、士郎サン。楽しかったよ。」

「先輩がお世話になりました。ありがとうございました。」

僕は笑って、リツカちゃんの手を振って、マシユは頭を下げて。

三者三葉の挨拶を告げて、衛宮邸を後にする。

春のような日差しが差して、木から鳥が数羽飛んだ。

3

カルデアに帰った後は大変だった。

カルデアに着くと、まず医療班に拘束されて、隔離された医療ルームへと運び込まれた。

それが終わると、ダ・ヴィンチちゃんから半日掛けて説教を食らった。

その後は一応昼休みとなったのだが、昼休み中もほかのサーヴァントたちからそれぞれ声が掛かって食事どころではなく、その昼休み休憩が終わった後はもう一度メデイカルチェック。その後にもマシユのお説教が飛んできて、結局休めたのは、カルデアに帰ってから一日後のことだった。

それから何日か経った後。

ベットの上で目が覚める。

なんだかとても久しぶりに感じた。

「……おはようございます。」

誰も居ない空中に話しかける。

だが、不思議と目が覚めた。

パーカーとジーンズに着替えて、自分の部屋を出る。

見慣れた白い廊下を歩いて、食堂へと向かう。

その途中でリツカちゃんに会った。

「あ、おはよう、リツカちゃん。」

「ん？…ああ、おはよう、りっくん。」

声を掛けると、普段通りに明るく笑う。

いや、それよりも、

「……何？その『りっくん』って。」

「嫌だったかな？」

「別に、嫌ではないけれど…。」

いきなりで少しびっくりしてしまった。

「しかし、何でまたそんな安易な仇名を…。」

「いやー、『立香』と『リツカ』で君と私、名前が似ているから、被らないように仇名で呼び合おうと思って。それに、何だか話しかける時に自分呼んでるみたいで嫌なんだよねー。」

「……さいですか。」

「代わりに私も『りっちゃん』で良いよ？」

「……………」

さすがにレベルが高い。

会って数日でこれとは……

いや、最近の女子って言うのはこんなものなんだろうか。

英霊って昔の価値観の人が多から、安易な仇名なんて付けようものなら最悪死ぬし、なによりここ一年間は女子との交流が無き過ぎてどう接していいか分からない。

いやいや、一応マシユも女の子だけど、どっちかって言う可可愛い後輩とか、もはや兄弟みたいな絆を感じ始めるからそういう目で見たことは無かったし…。

なんて、僕が狼狽えていると、リツカちゃんは声を掛けてくる。

「どうするのさ。呼ぶの？呼ばないの？」

「……OK。分かった。」

「お、観念した。勝った勝ったー！」

と、腕を振り回して喜ぶ彼女。

身長が伸びただけの小学生ではなからうかと思う。

口には出さない。

「…ところで、りっちゃん。朝ご飯は食べた？」

「あー、うん。もう食べたよ。この後十時くらいから、マリー王妃とお茶会に誘われる。」

「へえ…本当にすごいな、君のそう言う外交的な性質は。」

「それでしょー？」

「あ、でもマリー王妃はその呼び名じゃなくて、『マリーさん』とか『マリーちゃん』と

か、そう言う呼び名の方が喜ぶと思うよ。僕はまだ呼んだことは無いけど。」

「へえ、何で呼ばないのさ。喜ぶんでしょ?」

「アマデウスとサンソンが凄い目でこつちを見てくる。」

「ああ、なるほど。さすが親衛隊だね。」

「本当、その呼び名がぴったりだよ、あの二人は。」

そんな、他愛の無い話を十分くらいしただろうか。

彼女が突然切り出した。

「あ、そうだ。りつくん。」

「なに?」

「私、ここでマスターとして働くことになった。」

「へえ……うん?」

マスター?」

マスターってつまりマスターで、ってことはこのカルデアで契約し戦うってこと?

「うん、まあ、そうなるかな。ごめんね?君が心配してくれていることは分かっているけど、せつかくここに来たんだし、それに一応、私も魔術師だしね。ここでいろいろやりたいんだよ。」

「………そっか。うん。まあ、いいんじゃない?」

「止めないんだね。」

「君みたいに強い子は、止めたってきつと言う事を聞かない。」

「良く分かつてんじやん。」

そう言つて、ニツと意地の悪そうに笑う。

悪戯そうな笑みだった。

「まあ、一度でも君と話をしたら嫌でも分かるよ。」

「そつかー……。うん、じゃあそう言う事で、これからよろしくね、りつくん。」

「ああ、よろしく、りっちゃん。」

彼女の差しだした右手に右手で触れて、握手して。

「一緒に世界を守ろうじゃないか。」

そう言つて笑いあつた。

4

「やあ、マスター。朝からそんなに辛い物を食べて大丈夫かい？」

食堂のキツチンを使つて自分で作った特製辛口マーボー豆腐と豆板醤を使った特性ラー油で炒めたチャーハンを食べている時、後ろから声を掛けられた。

「ああ、マーリン。おはよう。」

「うん、おはよう。」

「大丈夫かどうかってことに関しては、そうでもないよ。好物に対してはかなり強いからね、僕の腸は。」

「そうかい、そりゃ重畳だ。」

そう言つて、僕の前に机を挟んで腰掛ける。

右手に珈琲、左手に本を持って、片手で器用に読んでいる。

表紙は僕が読めない文字で一行、短く題名らしきものが掛かっている。

「何を読んでるの？」

「ん？」

「その本。」

「気になるかい？」

マーリンが此方に目をやると、目だけで少し笑つた。

「んん……うん。少し、気になるかな。」

「じゃあ読むと良い。私はもう一回、この本を読んだからね。」

「ありがとう。」

手渡された本は、なんだか少し不思議な感じがした。

題名も背表紙も、見たことがあるのに思い出せないような感覚。

「……………」

本の中は、見たことも無いような、どこか未開の地の部族が作り出したような文字で溢れていた。

改行や段落違いの一文の空白、句読点やドットも見当たらない、ただの記号の羅列のような、無機質なイメージだ。

「……………」

文字は読めないし、本も見たことも無い。

そのはずなのに

「…………不思議な感じだ。」

「どんな風に?」

「なんか、文字が読めないのに書かれていることはなんとなく分かるような……………外国の人が日本語を覚えかけている状態で話している時みたいな印象を受ける。」

「ふむ…………なるほど。」

マーリンは深く頷いて、納得したという風に笑う。

「何がなるほど?」

「君の私に対する印象が、大体そんな風だったんだという事が分かった。」

マーリンが指を鳴らすと、僕の持っていた本は、魔法陣の描かれた一枚の札に戻った。

「……………今のは幻術?」

「正解。ふつと気が向いたから、少し遊ぼうと思つて。」

「性格が悪いね。DNAより捻くれてる。…どういふ仕掛け？」

「…今のは複合技術だよ。この札に書かれている魔法陣は認識疎外の魔術媒体となるものだ。自分の存在をその札へとコピーして、その札に魔力を流し込むことで活性化する。その札に対して、私は被術者の心理に反応して、今見ているものから一番に連想する比喩の実体へと具現化する。」

君の場合は私から連想するものは、その奇妙な本だったということさ。」

「ふうん……それは確かになるほどだね。」

「だろう？」

そう言つて、楽しそうに笑つた。

何だか、僕が帰つて来てから、彼はずっと笑っている印象を受ける。

「ところでマスター。君は正義について、どう考える？」

彼は笑つていいると思つた顔をすぐにまじめな風に戻して、そう聞いてきた。

「正義？」

「ああ、正義。彼が掲げて、最後には飲まれた存在理由について、君の考えを聞きたいなと思つてね。」

「……？」

マーリンの言う彼について、僕は誰の事かもわかっていないけれど、だが彼の言うとおりに、正義について考えた。

「……正義って言うのは、正義であつて正しさでは無いんじゃない？正義って言うのは個人の正しさ。正しさって言うのは世界の正しさ。つてことだと思ふな。」

「ふむ……そうだね。良いと思ふよ。」

「良いと思ふつて……正解とか、そう言うものつてないの？」

「無いよ。哲学にも世界にも、正解なんて存在しない。有るのは限りなく正解に違い誤答か、明らかな誤答か、その二つくらいだ。」

「……難しいな。」

「そうだね、難しい。私ですらも、そんな事は分かっていないんだ。」

「この話の意味は？」

「無いよ。只の気紛れだ。でも付き合ってくれたつて良いだろう？」

「まあ、構わないけれど……。」

「じゃあ良いじゃないか。只の年寄りの戯れ言に付き合うような心持で良いんだから。」

「そう言うものか？」

「そう言うものさ。それにこれは魔術の上達にもつながるよ。自分を知ることになるんだから。」

…では、君はさつき、正義とは自分の正しさだと言ったけれど、君のそれはなんなんだろう？」

「…僕の正しさ……。自分が掲げる正義か…。」

別に、僕にとつての正しさとか、そう言うのが無い訳では無いんだろうけれど、今まで深く意識したことが無かったからか、『これだ』というものがなかなか思い付かない。十秒ほど、たっぷり黙ってから口を開く

「……これかどうかは分からないけれど、こう在ってほしいというのは一つあった。」

彼は頷く。

なんだい？

そう問いかけられた。

「…これは理想であつて、正義じゃなければ正しくも無い。けれど、ただ一つだけ。

マシユとかりっちゃん笑顔で生きてほしいと思つたかな。

そのためならそれ以外をどうでも出来る自信はある。」

「本当かい？」

「うん、多少ばかりは比喻も混じっているけれど、ほぼほぼ本心。」

「そう。正直で大変結構。」

そう言つて、彼は満足そうに頷いているけれど、僕からしてみれば、何だか物足りな

いような、靄がかかって霧がかかって、何だかハッキリしない様な、そんな気分になった。なんだか僕だけ損をしたような気分になって、けどその気分の答えもすぐに出た。

「じゃあさ、マーリン。君の理想はなんなの？」

「私の理想かい？」

少し驚いたような顔をする。

そんなに意外なのだろうか。

「…そうだね。私の理想、私の正義か。」

そう言って、少し考える。

というよりも思い出すような雰囲気、彼は少し考える。

「……世界平和？」

「嘘吐け。」

「ええ…本当だよ。信じてくれ。」

「……………」

何だか胡散臭い。

「…私は本当にそれが理想だよ。世界が死んで、終わってしまったんだとしたら、君には会えないだろう？このカルデアという桃源郷も無くなることになる。」

そうになったら、面白くない。」

「……うん。なるほど。」

確かにその理想は本物らしい。

「そうだと、さつきから言っているだろう？」

私も君と同じように、この理想のためなら何だってできるとも。それこそ、打倒ビースト、とかね。」

「あんなの、何回も有ったら堪らないよ。」

「そうだねえ、あれは確かに大変だった。」

あの頃を懐かしむような思慮深い瞳で、彼はそう言つて笑つた。

「そうだ。あとで一言、シエイ氏とアンデルセン君に言つてやると良い。」

「は？何で、その二人？」

「いいからいいから。きつとその二人なら、色々面白い話が聞けると思うよ。」

『今回ののはやり過ぎじゃない？』と、声を掛けるんだ。」

「……別に構わないけどさ……。」

彼の瞳はいつもの悪戯っぽい猫のようなそれに戻っている。

僕が事の顛末を知るのは、それから二時間ほど後だったという。

5

天文台らしく、申し訳程度に設置されたカルデア内の星見台で、その日の夜にマシユ

と会った。

彼女はここが気に入っているらしく、たびたびここに来ていたそうだけれど、ここ一年ほど忙しかった僕は、こんな場所は少しも知らなかった。

「お疲れ様です、先輩。」

「ああ、お疲れ様、マシユ。」

「どうだった？」

「何がでしょう？」

「今日。僕としては久々にゆつくりできたような気がする一日だったなあなんて、そんな風に考えているけれど。」

「そうですか。私は、何故だか一日安心して過ごせました。」

「安心？」

「ええ、安心です。先輩が危なっかしいことをしていないという事がしつかり分かっているのです、安心して過ごせました。」

「一昨日は本当に悪かったって。まだ怒ってるの？」

「きつとこの怒りは根源に至るまで持っていくのでしょね。」

「そこは『墓』じゃないかな？」

「おや、そうでしたか。日本語とは難しいものです。」

「本当にそうだね。でも日本語に限らず、気持ちをしつかり伝えることのできる言葉で言うのは本当に素晴らしいと思うんだよ。」

「そうですね。その言葉に何度救われたか分かりませんが、救われたという事実は確かにある訳ですし。」

「……そう言えば、マーリンがマシユに謝っていたよ。『あの時は悪かったね。マスターのために必要な手順だったんだよ』なんて言っていた。」

「……何のことか分かりません。」

「…………うん、まあ分からないならいいんだ。」

「あ、そうでした、先輩。リツカさんにやつと『マシユ』と呼んでもらえるようになったんです。」

「おお、仲良くなったんだね。良いことだ。」

「はい。リツカさんは本当にいい人です。彼女と契約するサーヴァントも決まったようですよ。」

「へえ、それは僕、知らないな。誰？」

『立香君には人理修復直前に、マシユを筆頭とした約五十名のサーヴァントの方々と契約していたのを視野に入れて、まずは三人から契約を始めよう。』という司令代理の言葉から、マリーさん、アルトリア・リレイさん、玉藻さんの三人が契約を移されるよう

す。」

「契約したのが良い子たちで良かったよ。少し寂しい気もするけれど。」

「どういう心持なんですか……。」

「なんだか、自分の娘や妹が独り立ちする……みたいなの。」

「一つ言っておきますけれど、あの方たちは先輩より年上ですからね?」

「分かってるよ、それくらい。気の持ちようは自由だろう?」

「まあ、それですけれど……。」

「別に良いだろう? 僕は皆のマスターなんだから。」

「……ええ、そうですね。きつと、先輩も……。」

「……マシユ?」

6

声が聞こえなくなつてマシユが座っていたはずの隣を見ると、疲れていたのか、一定のリズムで息を吐きながら、舟を漕いでいた。

「……そりやそうだ。かなりハードだったはずなんだ。」

冬木まで来て、僕を説得して、次の日に帰る。

冬木からここまでが遠いから、かなりハードスケジュールになつたはずなのだ。一日かそこらで快復する疲れでもないだろう。

寝やすいように彼女を横たえると、ちょうど僕が膝枕をするような形になる。まあ偶には良いだろう。

今まで出来なかった僕からの恩返し最初の一步だ。

膝に置いた彼女の頭を撫でると、柔らかい感触が返ってくる。

こうしているとなんだか、仲の良い妹が出来たみたいだった。

「……………」

『貴方を…………私だけのマスターに…』

そんな言葉が頭に響く。

あれはきつと彼女の言葉だ。

マーリンが幻術で外に出した、彼女の内心——彼女すら気付いていない、潜在意識の具現。

「…………ごめん、マシユ。」

星見台に、僕の言葉が響く。

行き場を失ってだんだんと薄れていくけれど、それはこの場にも吸収されているように。
で。

そのまま、僕がこの言葉を言ったという事実が無くなってしまいそうで、少し不安だった。

「ごめん、マシユ。僕は君だけのマスターにはなれなかった。結局、傍から見た君と僕は、数ある関係の中の平凡な一つに過ぎないように見えると思う。」

誰に聞かれるわけでもないが、なんだか緊張する。

何時になつても独白というのは慣れない。

「僕にとつて、君というのは大切な存在だ。何物にも代えがたい。君の心を知るすべは無いけれど、きつと君にとつての僕もそうであつてほしいと願うよ。」

僕の耳に入ってくる僕の声は、自分で思つていたよりもずっとやさしそうに喋つていた。

優しそうに喋れていた。

「僕は君だけのものにはなれないし、これからもきつとなることは無いだろう。」

でも、僕は約束するよ。」

息を吸つて、吐いた。

少しだけ白い息が出た。

「僕は君だけのマスターにはなれないけれど、君のマスターにはなろう。」

ほかの人と同等……それ以上の愛で君を愛そう。」

小説のセリフを読んでいよう、不格好で、様にならないにもほどが有ろうと思つた。

でも、素直に表現するにはこれくらいしかないだろうから。

「これからもよろしく、我がサーヴァント、我が後輩。君が愛してくれるなら、その倍の愛で君に返そう。君が生きてくれるなら、僕も次の時間を生きよう。」

言い終わって、僕は満足した。自己満足も甚だしいが、ただ僕は満足をした。

その後、ゆっくりと彼女の頭を撫でると、幸せそうに眠る彼女の顔が髪の間から覗いて、すこし安心する。

そのまま、星見台で時間が過ぎた。

7

少し寝てしまったようで、気が付けば星は消えていた。

代わりにあったものと言えば、天窓から差し込む斜めの日射と僕の膝にあるマシユの頭だった。

マシユの頭のある膝は少し濡れていて、蒼いジーンズの太ももの辺りを丸く紺色に染めていた。

泣いていたのか、彼女の眼尻は赤い。

「……………おはようございます。」

ベッドでは無いが、しっかりと眠ることが出来たらしい。

骨が痛いだけで、疲れは無かった。

彼女の頭を撫でて、朝を知らせる。

「マシユ、朝だ。そろそろ起きてくれ。」

「……………うう。」

小さな唸り声がして、マシユの頭が少し動く。

「……………うん……………はい!?!」

そして僕の顔を見るなり、一瞬固まつてから腹筋をフルに使った上体起こし運動で跳ね起きた。

「せっせっ先輩!?!」

「おはよう、マシユ。」

「あつ、はい、おはようございます。…ではなく!なんで私は先輩のお膝で就寝を!?!」

「昨日ここで話してたら寝ちゃったから、そのまま休ませてたらいつの間にか僕も寝ちゃった。」

それを告げると、マシユの元々白かった顔がさらに白くなって、その直後に耳まで一気に赤くなった。

「……………マシユ?」

「先輩!」

彼女の顔を覗き込むと、すぐに鼻と鼻が触れ合うくらいまで顔を近付けられた。

「……一つだけお願いしても良いですか？」

「お、おう。何かな？我が後輩よ。」

「今回あったことは忘れてください。」

「理由は？」

「私的に恥ずかしくて憤死してしまいます。」

「じゃあ、ダメだ。寝顔が可愛かったから忘れるわけにはいかない。」

そんな風に僕が言うと、顔がさらに赤くなる

「……………」

「偶には良いだろう？」

「うう……………」

「それによく眠っていた。しっかりと睡眠を取っていることが確認できたし、僕としてはかなり満足かな。」

「……もう！先輩なんて知りません！」

暫く僕が喋っていると、我慢できなくなつたのか、マシユはいきなり立ち上がって、そう怒りながら部屋を出て行ってしまった。

すこし揶揄いすぎただろうか。

「……………やってしまったな。」

「ん？」

ドアの方を見て呆然としている僕に、後ろから声が掛かる。

振り向くと、赤い外套が立っていた。

「…今回の事は済まなかったな、マスター。」

「今回の事？」

「手助けが出来なかった。」

「ああ……大丈夫だよ、きつと君は僕に腹を立てていたんだらうから、それくらいは甘んじて受け入れよう。」

僕がそう言うのと、彼は笑った。

「ありがとう。」

「構わない。でも、今回の件の理由くらいは聞きたい。大体のことはシェイクスピアとアンデルセンから聞いたけど、動機だけは聞けていないから。」

「……その事か。」

何、簡単なことさ。彼の賢王が少し前に、君の発狂を予見してね。それを阻止しないと、後々面倒なことになると分かって、花の魔術師に賢王は相談のような報告をした。

それが発端だよ。それからは君が知っている通り、シェイクスピア氏の宝具と花の魔術師のスキルを合わせた複合魔術で君の夢に干渉。それと同時にマシユにも接触 e t

c..

という訳さ。」

「ふうん……なるほど、じゃあ君たちは僕を助けてくれた訳か。」

「それは結果論だ。一歩間違えば君は死んでいた。現にこの間はそんな感じだったろう？」

「そんな感じって……」

まあ間違っちゃいないが。

「……まあいいや、ありがとう、エミヤ。」

「…………どういたしまして、マスター。」

それよりも、彼女を追わなくていいのか？仲違いは短いに限る。」

「うん、そうだね。行ってくる。」

仲違いというほどの事ではないけれど、それでも喧嘩は短い方が良い。

天文台の扉を開けて外に出てとりあえず食堂の方に走る。

背中の方でやさしく笑う男の気配がした。

少し走って、すぐにその背中に追いついた。

「……マッシュ。」

「…………。」

「無視するなつて、悪かったよ。」

「……………」

「……………マシユ？」

「先輩。」

何回か話しかけると、そつぽを向いてツンとしていた彼女が振り向いた。

少しばかりほつとして、その心境が照れ臭く思えた。

だが、彼女から発された言葉は、その気持ちを飛ばすには十分の威力を持っていた。

「先輩、あなたは英雄になりたいのですか？」

「英雄？突然どうしたのさ。」

「いえ、ふと思ったのです。」

そう言うのと、彼女は少し顔を伏せる。

「先輩、あなたは世界を救いました。今なら、私が証人となって、英雄として世界に名を轟かせる事が出来ます。それどころか、英霊に選ばれることすら、今なら可能でしょう。」

「……………」

「私は、それを強制しようとは思いません。なぜなら、それは私のエゴで、あなたの本心ではないと思うからです。でも、もし少しでも先輩がそれを望むなら、と。そう考える

「ことがあるのです。」

「……………」

「答えてください、先輩。最近、私はずっとそれについて考えています。長い間悩んでいるんです。このまま、あなたの成果が知れることのないまま、世界の歴史にあつた数多くの出来事一つとして廃れていくことが、私にはどうしても許されないことのように思えて仕方が無いのです。」

「…………マシユ。僕は…………」

如何なのだろう。

子供の頃に考えたことがある。

正義のヒーローになって悪を討ち果たして、誉められてみたい。

何度も思つて、結局それが果たされることも無いまま、今に至る。

きっと僕が倒した魔術式は、世界のため、自分の正義を掲げて努力した一人に過ぎないのだ。それが結果的に悪い方向に向かうとしても、自分とそれを取り巻く環境のゴゴで邪魔をして、一つの生物の自由を奪って消滅させた。

だから、きっと僕は褒められるべきではないと考える。

それどころか、誉められてはいけないのだ。

そんなことを考え始めて、息苦しくなつて胸が気持ち悪くなるけれど、何とか飲み込

む。

救われたとはいえ、やはりすぐにこういうことを考える癖は治っていない。

「僕は、良いんだよ。そう言うのは要らない。」

「……………」

「あの一年は、悪魔の一年だ。有るはずの無いことが起きて、死ぬはずじゃなかった人が死んで、だからきつと忘れられるのが一番いいんだ。」

別に、僕たちは忘れる必要は無い。忘れるべきは世界だ。

「僕たちがあの一年を覚えていれば、少なくとも僕たちの中で、あの一年は記憶に残る。」

「ですが……」

「それに、僕の話はマシユが一番よく知ってくれているでしょ？ エミヤも、マーリンもそうだ。」

「世界の英雄たちが僕の事を知ってくれている。その事実だけで、僕は十分だよ。」

「……………」

「ありがとう、マシユ。君は僕のことを一番に考えてくれる。」

僕にはそれが嬉しいけど、でもそれで君を苦しめるほど考えては、僕の立つ瀬がない。」

「先輩……。」

「迷惑ではないよ。とても嬉しいんだ。だけど、君の重荷にはしないでくれ。それでは君を悲しませてしまうから。」

そう言うと、彼女は何か言いたげに口を開いて、でもそれをすぐに閉じた。

「……分かりました。すみません。」

そう言つて、悲しそうに笑つた。

8

結局この物語は、なるようになって終焉した。

僕と関わつた人を一人残らず傷つけて、僕自身すらも傷ついて、それで終わった。

後悔もして、つらい記憶と向き合つて、色々な人に助けてもらいながら更生して、それで人間的に成長した。様に思う。

新たな友人も出来た。

愛すべき対象も、同期の仲間もできた。

彼らに返しても返しつくせないような恩が出来た。

その存在は、少なくとも僕が生き続ける、死なない理由にはなってくれそうで、心から安心できたのは、一番大きな影響な気がする。

「ねえ、りつくん。本当にいいの？君の活躍を世界に知らしめなくても。」

食堂の机に向かいあって、二枚のトランプの裏側をひらひらと見せるりっちゃんが、そんなことを言った。

「いいんだよ、これで。僕のことを知れ渡って、力を持たない小さな子供がテロリストに立ち向かったりしたら大変だ。」

僕の手札は一枚だけのクローバーK。

向かって右側の手札を引くと、愚者のイラストが顔を覗かせた。

「りっくんは優しいなあ。」

そう言っ、彼女はKに手を掛ける。

引き抜くと、ニヤリと笑って手札を捨てた。

「優しいんじゃないよ。ただ残酷なだけ。」

「残酷でも相手にとつて優しければ、それは優しきんじゃない？ 君はいろいろな気負い過ぎなんだよ。責任とか、色々。」

「背負わなきややつてこれなかったんだから、仕方ないだろう？」

「そりゃあ、ね。」

そう言っ、悪戯そうに彼女は笑う。

「でも、まあ、君の成長は世界にとつて良い方向に進むらしいね。」

「はあ？」

「なんて言ったっけ、あの人……ああ、そうだ。ギルって王様から聞いた話。」
「ああ、そう。」

「世界はこの後いい方向に進む。遅かれ早かれ人は死ぬが、それでも、最後にはいい方向へと収束し、平和に包まれ、繁栄する。」

「そう。」

端的な返しを、彼女は笑って受け流す。

「ならしいね。」

「だどいいな。」

そう言って笑いあつた。

少なくともこの空間は、世界で最も平和であつた。